

Y a g o r o u

弥五郎遺跡 2

集合住宅建設に伴う八女市室岡所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第134集

2022

八女市教育委員会

Y a g o r o u

弥五郎遺跡 2

集合住宅建設に伴う八女市室岡所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第134集

2 0 2 2

八女市教育委員会

序

本報告書は、八女市室岡に所在する弥五郎遺跡の中で、共同住宅建設のため現地保存が困難となった部分について記録保存発掘調査を行ったものです。弥五郎遺跡では、平成27年度の西隣接地に続いて2回目の発掘調査です。発掘調査では1次調査と同様に、平安時代の建物跡や貴重な土器などが発見された他、弥生時代の遺構・遺物も出土し、室岡地区の弥生時代・平安時代の集落の様子がより明らかとなりました。室岡遺跡群は八女市内でも有数の弥生時代集落遺跡で、当時最先端の素材である鉄の使用も確認されるほか、平安時代では防長系の緑釉陶器など一般集落では出土しない遺物も確認されており、今後の調査の進展が期待されます。

本書を、八女市の歴史を知る資料として、活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、文化財保護にご協力いただきました開発事業者の皆様、発掘作業員・整理作業員の皆様、福岡県教育委員会はじめ関係各位に改めて感謝申し上げます。

今後も、八女市の文化財保護行政にご理解とご協力をお願い申し上げます。

令和4年3月31日

八女市教育委員会
教育長 橋本 吉史

例 言

- ・本書は、共同住宅建設に先立ち矢加部恵智氏（仲介：大東建託株式会社熊本北支店）の委託を受けて実施した、八女市室岡字志計775番地1所在、弥五郎遺跡第2次発掘調査の報告書である。
- ・本報告の発掘調査は令和2年度に八女市教育委員会が実施し、整理作業は令和3年度に実施した。発掘調査は八女市教育委員会の檀佳克が担当した。
- ・本書の遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）をもとに作成し、図面で示す方位は、全て座標北である。
- ・本書で使用した遺構実測図は、大庭孝夫（福岡県文化財保護課）・檀および発掘作業員で作成した。また、本書掲載の遺物実測図作成及び製図は、檀および整理作業員で作成した。
- ・本書の編集は檀が担当した。なお、遺構実測図・写真図版編集作業の一部は、甲斐郁・平俊隆（八女市文化振興課）の補助を得た。
- ・本書作成にあたり、発掘調査中に下記の方々からご教示を得た。記して感謝申し上げる。大庭孝夫（福岡県教育委員会）・坂本真一（九州歴史資料館）（敬称略）
- ・調査図面・写真および出土遺物は八女市教育委員会で保管している。有効な活用を望む。

目 次

本文目次

1	調査の経緯と経過	1
2	遺跡の位置と環境（地理的環境・歴史的環境）	4
3	調査の方法と基本層序	4
4	出土遺構と出土遺物	7
	A調査成果の概要	7
	B弥五郎遺跡第2次調査1区の遺構と遺物	7
	C弥五郎遺跡第2次調査2区の遺構と遺物	17
	D弥五郎遺跡第2次調査の表土・排土出土土器	20
5	総括	21

挿図目次

第1図	弥五郎遺跡の位置
第2図	弥五郎遺跡の位置および周辺の遺跡（S=1/5,000）
第3図	弥五郎遺跡第2次調査区全体図（S=1/500）
第4図	弥五郎遺跡第2次1区調査区全体図（S=1/200）
第5図	弥五郎遺跡2次1区SB01実測図（S=1/80）
第6図	弥五郎遺跡2次1区SB02実測図（S=1/80）
第7図	弥五郎遺跡2次1区SD01・SD03出土遺物（S=1/4）
第8図	弥五郎遺跡2次1区SD01実測図（S=1/100）
第9図	弥五郎遺跡2次1区SD03実測図（S=1/100）
第10図	弥五郎遺跡2次1区SK01実測図（S=1/80）
第11図	弥五郎遺跡2次1区SK01出土土器1（S=1/4）
第12図	弥五郎遺跡2次1区SK01出土土器2（S=1/4）
第13図	弥五郎遺跡2次1区SK01出土石器（S=1/2）
第14図	弥五郎遺跡2次1区SK04実測図（S=1/80）
第15図	弥五郎遺跡2次1区SK05実測図（S=1/80）
第16図	弥五郎遺跡2次1区SK08実測図（S=1/80）
第17図	弥五郎遺跡2次1区SK04・SK08・SK09出土遺物（S=1/4）
第18図	弥五郎遺跡2次1区SK09実測図（S=1/80）
第19図	弥五郎遺跡2次1区土器集中部出土遺物（S=1/4）
第20図	弥五郎遺跡2次1区ピット出土遺物（S=1/4）
第21図	弥五郎遺跡2次1区遺構外出土遺物（S=1/4）

- 第 22 図 弥五郎遺跡第 2 次 2 区調査区全体図 (S=1/200)
- 第 23 図 弥五郎遺跡 2 次 1 区 SD01 実測図 (S=1/150)
- 第 24 図 弥五郎遺跡 2 次 2 区 SK03 実測図 (S=1/80)
- 第 25 図 弥五郎遺跡 2 次 2 区ピット出土遺物 (S=1/4)
- 第 26 図 弥五郎遺跡 2 次 2 区土器集中部出土遺物 (S=1/4)
- 第 27 図 弥五郎遺跡 2 次調査 遺構外出土遺物 (S=1/4)

表目次

- 第 1 表 弥五郎遺跡 2 次調査出土遺物観察表

1 調査の経緯と経過

今回発掘調査を実施した弥五郎遺跡は、福岡県八女市室岡字志計 774 番地 1 に所在する。

本件発掘調査は、当該地に集合住宅建設が計画されたことに起因する。その旨文化財保護法に基づく届出があり、杭工事を伴う集合住宅 2 棟の建設が計画されていることを知った。隣接地でも集合住宅建設に際し埋蔵文化財が存在し、発掘調査を実施しており（檀 2016）、またその調査の際に南隣接地でも土器等の散布を確認していた為、本件工事計画地の地下にも埋蔵文化財が存在する可能性が極めて高いと思われた。このことから、文化財保護のため建物基礎深度等に関し事業者と協議するとともに、試掘・確認調査を実施した。

その結果、当初の想定通り、地表下約 30～40cm で柱穴や弥生土器等が存在することが確認された。建物基礎の変更も困難で、埋蔵文化財を現地保存することが困難となったため、発掘調査を実施することとなった。

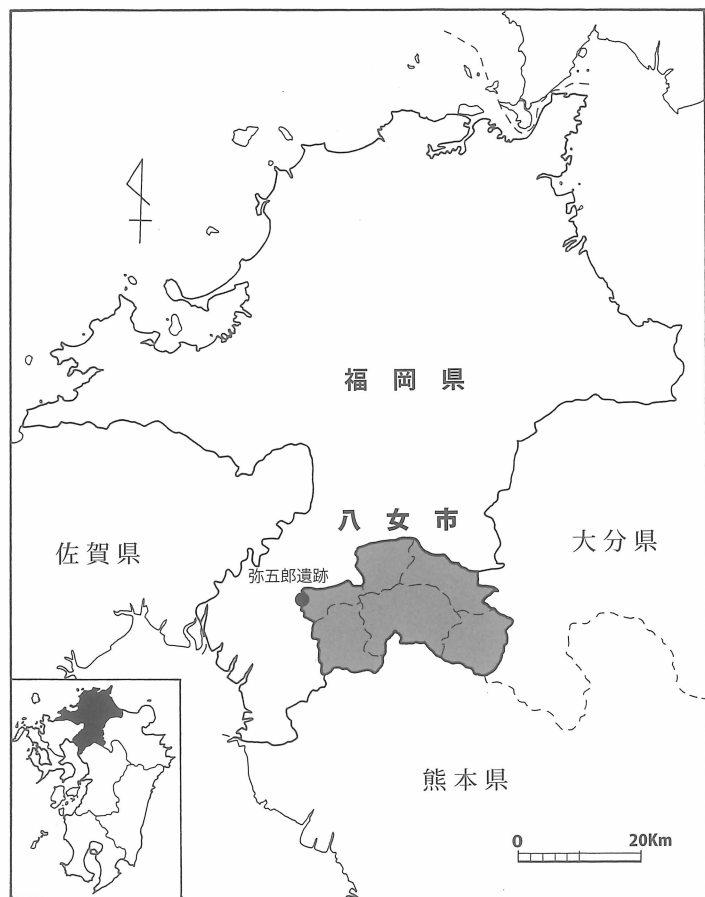
以上の協議結果を福岡県教育委員会に伝達したところ、福岡県教育委員会より発掘調査実施の旨指示があり、その旨を事業者に伝えた。

令和 2 年 12 月 28 日に発掘調査の覚書・協定書を締結し、住宅建設予定地の約 280 m²の現地発掘作業を令和 2 年度中に、整理作業および報告書作成作業を令和 3 年度に実施することとなった。

発掘調査実施当時の令和 2 年度は、文化財専門職員が少ない中、民間開発・公共事業共に発掘調査件数が多く、他の発掘調査現場の完了を待たないと弥五郎遺跡の発掘調査実施が困難であった。八女市教育委員会では、福岡県教育委員会に文化財保護法第 99 条第 1 項に基づく発掘調査の報告をし、現地作業を令和 3 年 1 月 21 日から着手し、令和 3 年 3 月 31 日に完了した。

当時は厳寒の時期であり、また開発への文化財保護対応の相談も増加している時期であったため、発掘調査は時折中断を挟みながら断続的に実施する他無かったが、令和 3 年度中に何とか発掘現場を完了出来たという状況であった。

出土遺物は整理箱 3 箱分で、令和 3 年 4 月 5 日に八女警察署に発見届（2 八文文第 1673 号）および福岡県教育委員会に保管証（2 八文文第 1674 号）を提出した。令和 3 年度は整理作業（遺物の洗浄・注記・復元）を実施した。その後、発掘現場作成の図面・写真の整理を行い、発掘



第 1 図 弥五郎遺跡の位置

調査出土遺物の実測図作成後、図面製図・出土品写真撮影等を行い、令和4年3月に報告書作成を完了した。発掘調査後、当該地は集合住宅建設工事がなされ、令和4年現在の発掘調査地はアパートとして利用されている。

なお、調査当時の体制は、以下のとおりである。

【令和2年度】（現地作業）

（調査委託）矢賀部 恵智（仲介：大東建託株式会社熊本北支店）

（調査主体・調査統括）

八女市教育委員会

（調査主体）八女市教育委員会

教 育 長	橋本 吉史
教 育 部 長	原 信也
文化振興課長	久間 政幸
同 課長補佐兼文化係主任	深町 明夫（調査総括・事務担当）
同 参事補佐兼文化係長	高山 康博
同 係 員	高口 愛（経理事務担当）
同 係 員	檀 佳克（調査担当）
同 係 員	甲斐 郁

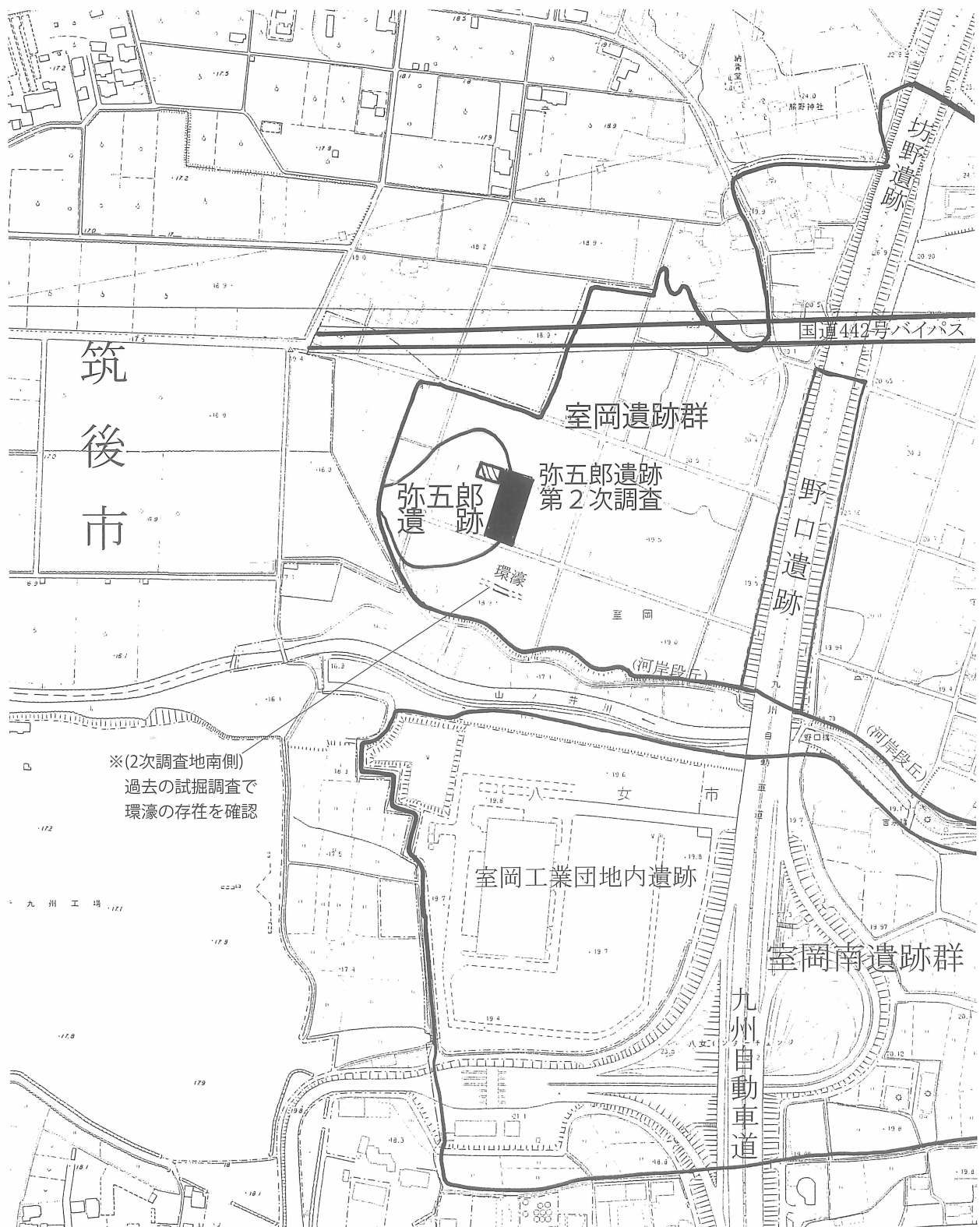
【令和3年度】（整理作業・報告書作成・刊行）

八女市教育委員会

（調査委託）矢賀部 恵智（仲介：大東建託株式会社熊本北支店）

（調査主体）八女市教育委員会

教 育 長	橋本 吉史
教 育 部 長	原 信也
文化振興課長	鵜木 英希
同 課長補佐兼文化振興係長	森田 尚美
同 参事補佐兼文化財係長兼 歴史文化交流館係長	片山 あづさ（調査総括・事務担当）
同 文化財係 係 員	檀 佳克（本報告担当）
同 係 員	甲斐 郁
同 係 員	木原 堯
同 嘱 託	平 俊隆



第2図 弥五郎遺跡の位置および周辺の遺跡 (S=1/5, 000)

2 遺跡の位置と環境（地理的環境・歴史的環境）

弥五郎遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地「弥五郎遺跡」の中に所在し、室岡遺跡群の西端部分にあたる。八女市でも西端部分にあたり、西側約 50 m は隣の筑後市となる。西側には平野部が広がり、現地では佐賀市付近まで遮るものではなく見通しが利く。

旧八女市域の大半は、八女市域中央を東西に流れる矢部川によって形成された沖積平野部であり、弥五郎遺跡はその沖積平野北端部にあたる。すぐ北側には八女丘陵が東西に延びている。また、すぐ南側には一級河川である山ノ井川が東西に流れており、弥五郎遺跡は八女丘陵と山ノ井川にはさまれた河岸段丘上に位置している。

弥五郎遺跡では、過去に大量の弥生土器が出土したことが知られており、平成 21 年度に今回調査地の南側で共同住宅建設に伴い実施した確認調査でも、地表下約 50～60cm に弥生時代後期の遺構・遺物が濃密に存在することが知られていた。また、調査地北側に東西に延びる国道 442 号線バイパスでは、調査地北側付近でも多くの発掘調査が実施されている（志計遺跡・織部屋敷遺跡・田代遺跡など、赤崎 2007）。

また、平成 27・28 年度に、弥五郎遺跡周辺では宅地造成・下水道敷設等に伴って試掘・確認調査や工事立会が相次いだ。その結果、現在の弥五郎遺跡の範囲よりもさらに東側に向かって弥生時代後期および古墳時代前期の集落跡が広がっている状況が確認されている。加えて、平安時代の遺構・遺物は今回の調査地の西側から北西側にかけて展開していることも、上記の下水道管布設関連の工事立会等で判明している。

以上のように、弥五郎遺跡周辺は旧八女市の中でも弥生時代をはじめとして各時代の遺構・遺物が濃密に存在する地域であるため、今後も弥五郎遺跡周辺での開発には細心の注意を要する。

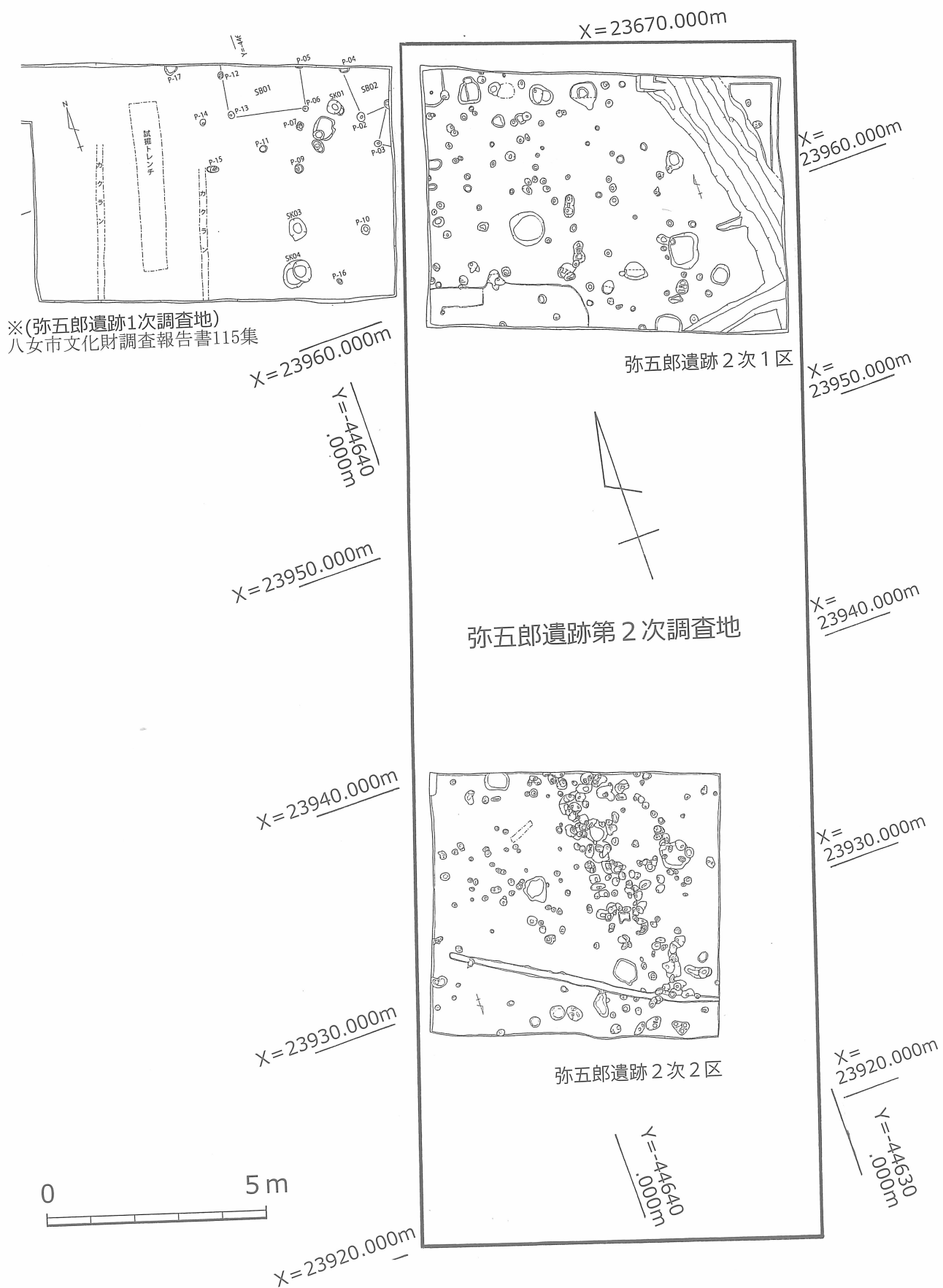
【参考文献】

- ・赤崎敏男 2007 「一般国道 442 号八女筑後バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」八女市文化財報告書第 77 集 八女市教育委員会
- ・檀佳克 2016 「弥五郎遺跡」八女市文化財調査報告書第 115 集 八女市教育委員会

3 調査の方法と基本層序

調査では重機で表土除去後、人力で掘削をした。表土を除去した状態で、既に包含層は過去の削平によりほぼ消失している状況であり、表土直下で遺構面が確認された。

基本土層は表土層（地表面～地表下約 20cm）の下に、表土に黒ボク土ブロック・黄色ローム土ブロックが混在する攪乱層がある（地表下約 30～40cm）。残存の良い箇所では厚さ約 5 cm 程度は弥生時代から中世にかけての遺物包含層に相当する、黒ボク土の残存が確認されたが、その下位の地表下約 40～60cm で、やや暗褐色の黄色ローム層ないし暗褐色粘土層（黒ニガ土）があり、その面でピット・土坑・溝状遺構等の遺構が検出された。遺物包含層は第 1 次調査時（檀 2016）と同様に攪乱を受けており、遺跡の残存状況は決して良好とは言えないものの、今回の調査箇所では、完全に遺構が消失するまで削平を受けている状況では無かったため、遺構

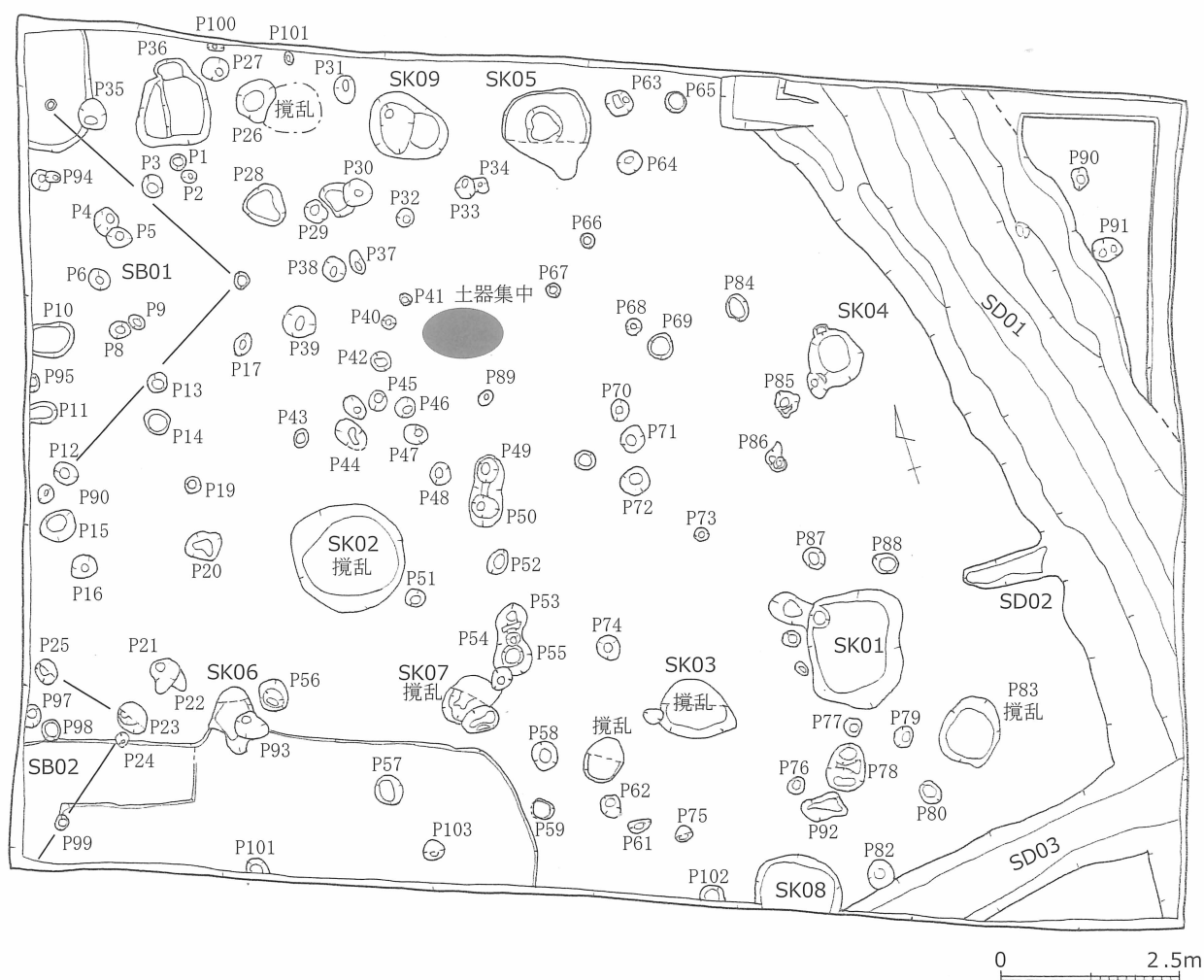


第3図 弥五郎遺跡調査区全体図 (S=1/500)

の残存状況は西隣の第1次調査時よりは良好であった。この状況は、今回の調査地付近の旧地形がもともと東側から西側に向かって緩やかに地標高が高くなっていることを示している。このことは、第1次調査時に筑後市教育委員会より御教示を受けた内容とも一致し、西の筑後市側に向かって旧地形が高くなっていることを示している。

調査では検出されたピットに関して、掘削過程で斜めに入り込む等の断面形状により、明らかに動植物によるものと思われるものと、柱穴になりそうなものとを区別し、原図に明記したが、本報告では十分な検討が出来ているとは言い難い現状であり、本報告では検出したピット全てを図示した。また、土坑状の形態のものについて便宜上SKの連番で遺構名を付したが、調査の結果近現代の遺構と判明したものもある。

また、柱穴の平面配置や形状等を現地で検討し、可能性が考えられるものとして2棟の掘立柱建物跡を示した。ただし、後述の2区北西箇所のピット群は相当回数の建物が同一箇所に繰り返し建てられている可能性が高く、建物を十分に把握することが困難であったため、ピットのみ全てを図示している。特に掘立柱建物跡に関しては、示している軒数以上に存在する可能性があるため、今後も検討を要することを付記しておく。



第4図 弥五郎遺跡2次1区調査区全体図 (S=1/200)

4 出土遺構と出土遺物

A 調査成果の概要

弥五郎遺跡第2次調査は、2棟の共同住宅建設箇所の調査であるため、2つの調査区に分かれている。調査の便宜上、北側の調査区を1区、南側の調査区を2区と命名した。1区では、溝状遺構（SD）3条、土坑（SK）9基、掘立柱建物跡2棟+αピット103基を検出した。2区では、溝状遺構（SD）1条の他、土坑4基、ピット243基が発見された。

遺構の時期は、出土遺物や遺構の特徴から、大半が平安時代（8世紀後半～9世紀前半前後）と思われるが、1区SD01はその形状から弥生時代の環濠と思われる。

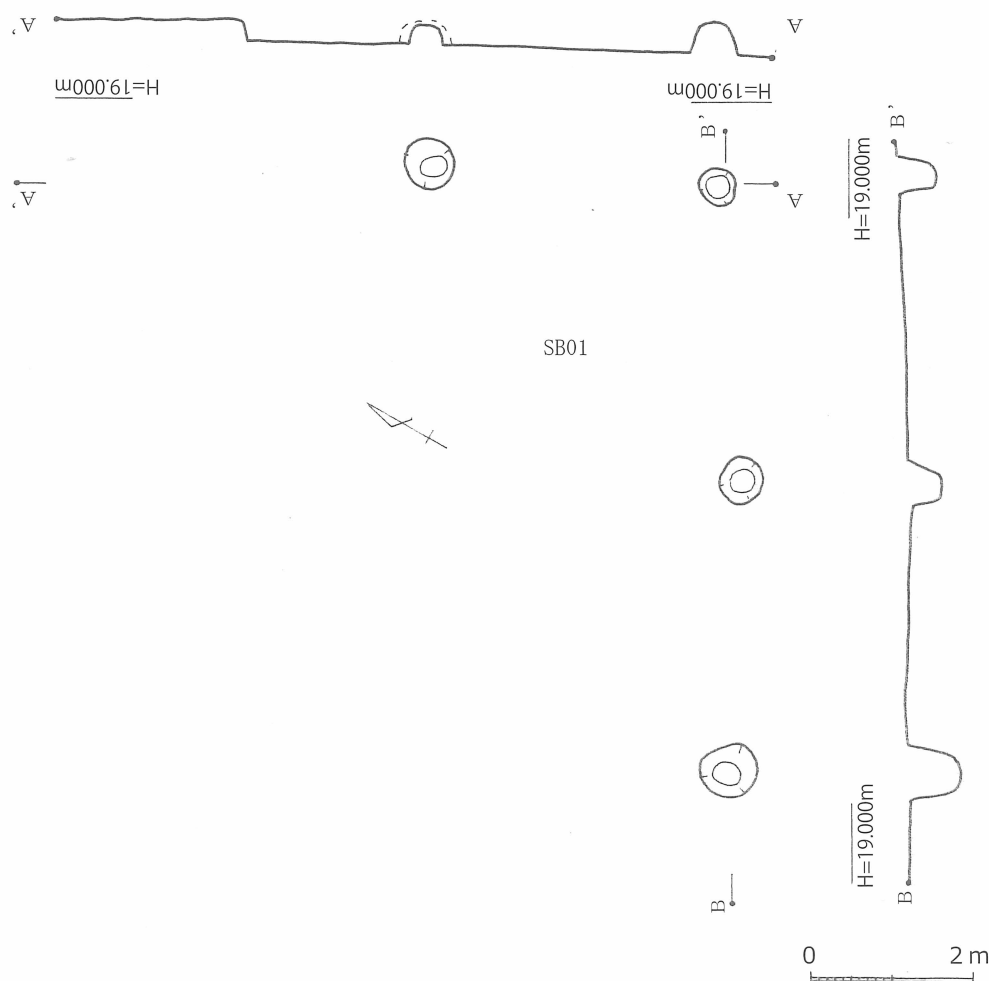
以下に、各遺構について説明する。

B 弥五郎遺跡第2次調査1区の遺構と遺物（第4図～第20図）

①掘立柱建物跡（SB）

1区では、調査区外に延びるため不確定ではあるが、柱穴配置から掘立柱建物跡の可能性のあるものが2棟見いだされた。以下に2棟の概要を示す。

1号掘立柱建物跡（SB01）（第5図）

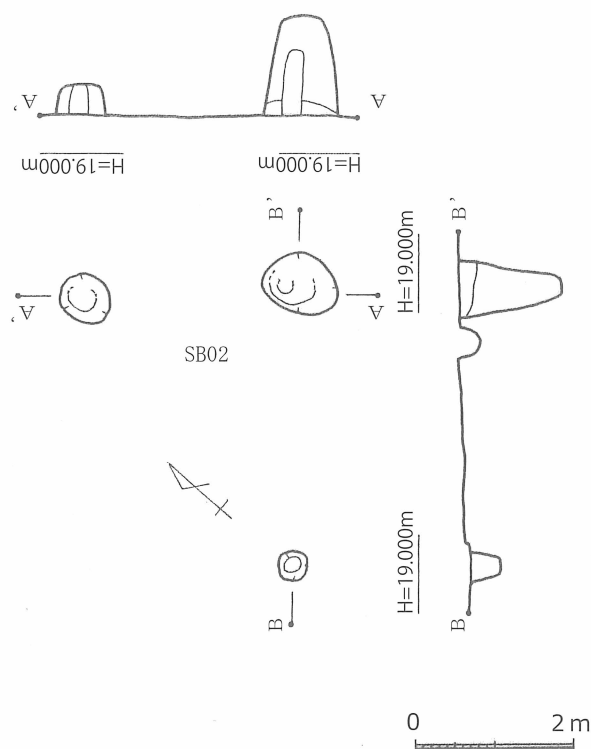


第5図 弥五郎遺跡2次1区SB01実測図（S=1/80）

調査区1区の北西部にある掘立柱建物跡である。北西—南東方向および北東—南西方向に柱穴と思われるピットが3基ずつ並び、残りの箇所は調査区外に延びる。柱間は約2mである。南西端のピット(P12)がやや深くなっている点を考慮すると、不確定な部分も残るが北西—南東方向に長軸をもつ2間×3間の建物跡が推定される。形状から、時期は古代に属すると思われる。

2号掘立柱建物跡 (SB02) (第6図)

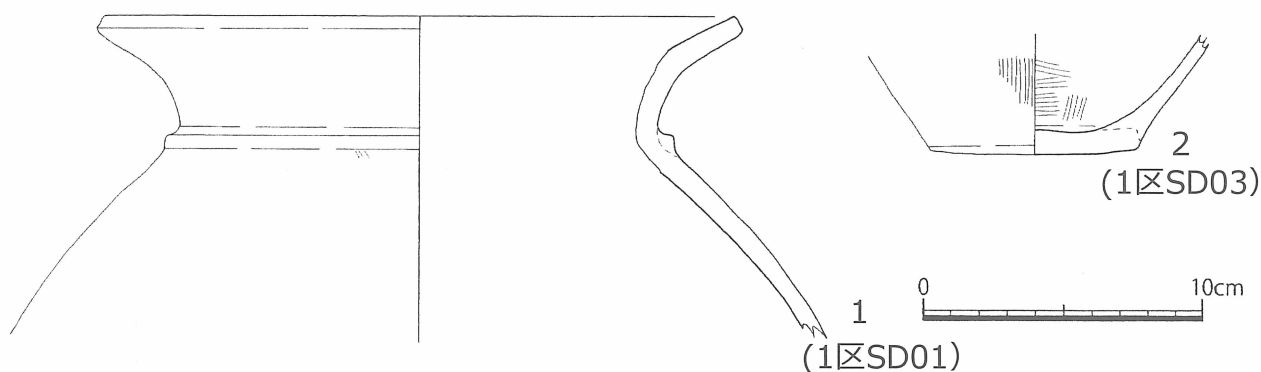
調査区1区の南西隅で発見した。大半が調査区外に延びるが、SB01と同様に、北西—南東方向に長軸をもつ建物跡である。ピット3基のみであり不確定な部分は残るが、SB01と同様に2間×3間の掘立柱建物跡であると推定される。柱間は約1.8mである。ピットでは柱穴中央で焼土粒・炭粒の入る黒褐色土層が確認されたものがあり、柱穴の抜き取り痕と思われる。前述のSB01と軸がほぼ同一であることから、SB01と同じく古代に属すると思われる。



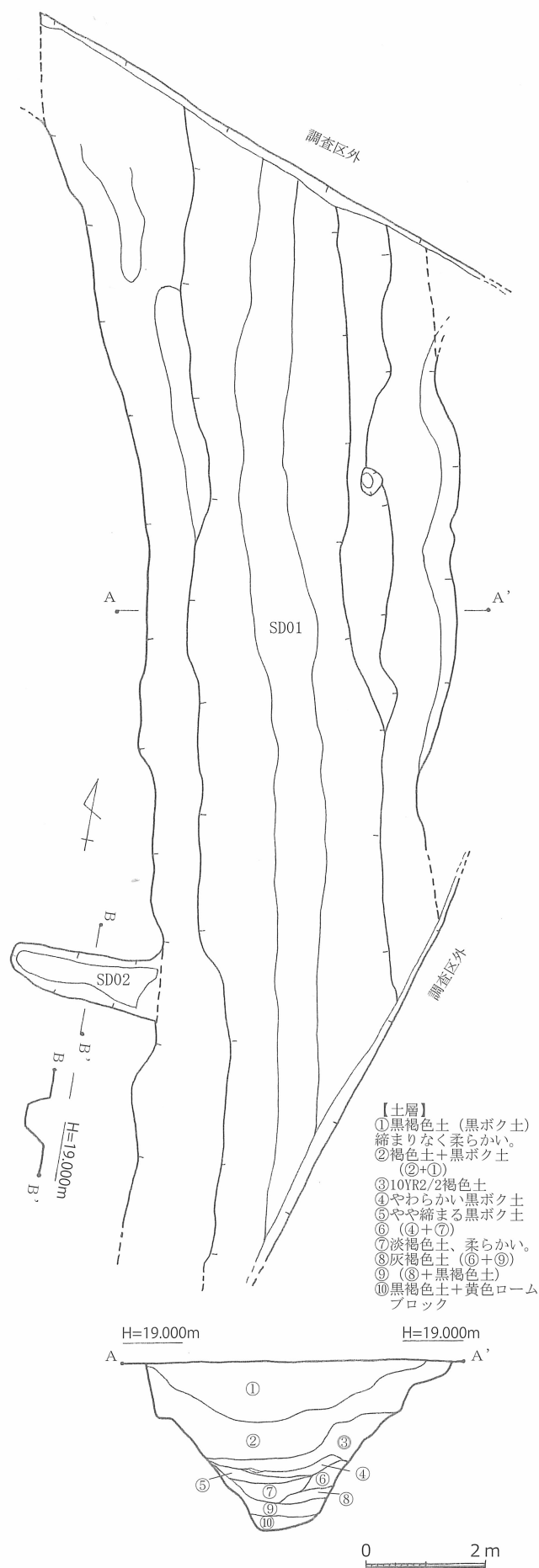
第6図 弥五郎遺跡2次1区SB02実測図
(S=1/80)

②溝状遺構 (SD)

1区では、溝状遺構は計3条発見された。いずれも調査区東端で発見され、SD01はその形状から弥生時代の環濠、SD02・03は周辺出土遺物や形状等から平安時代に属する可能性がある。以下にその概要を記す。



第7図 弥五郎遺跡2次1区SD01・SD03出土土器 (S=1/4)



1号溝状遺構・2号溝状遺構(SD01・SD02)（第7・8図）

1区東端で検出した溝状遺構である。北西—南東方向に直線的に近い形で延びるが、若干緩やかなカーブを描いて西側範囲を囲む形状にも思われる（第4図参照）。覆土は締まりのない黒ボク土が主体であり、底面付近に灰色の粘土層が多少形成されているが、水性堆積層は確認できないことから、水路等の水を貯えた溝ではなく、空堀であった可能性が高い。断面形状は逆三角形に近い形であり、その形状・特徴からは室岡遺跡群で発見されている環濠（室岡・山ノ上遺跡等）の形状に近い。弥生時代の環濠である可能性が高いと思われるが、遺物の出土はほとんどなく、弥生時代後期の土器が数点出土したのみであった。SD01出土土器を第7図1に示す。1は壺形土器で頸部に1条の突帯を巡らせている。時期は弥生時代後期に属する。

SD02は、SD01の西側中央付近で検出された溝状遺構であり、土層の観察からSD01埋没後に形成された遺構である。長さ約120cm、幅約40cm程度であり、後世の樹木等により形成された可能性も否定できないが、区画溝等の可能性もある。出土遺物は無かった。

第8図 弥五郎遺跡2次1区SD01実測図（S=1/100）

3号溝状遺構 (SD03) (第7・9図)

調査区南東端で検出した溝状遺構である。調査時は作業通路として使用していた箇所から発見され、調査の不手際で検出が遅れて調査終盤に発見した溝状遺構である。東端でSD01と重なる。調査時に土層の検討を行った結果、埋没したSD01を掘り込む形でSD03が掘削されている状況が確認され、SD01埋没後にSD03が作られている状況が、調査区東壁等で確認された。

ほぼ東西方向に直線的に延び、幅は約90cm、底面約50cmの逆台形を呈する。

出土遺物は図示できるものは1点であるが(第7図2)、SD01と重なる箇所での出土であり、SD01に伴う可能性も残る。2は甕形土器ないし壺形土器の底部である。時期は弥生時代後期に属する。

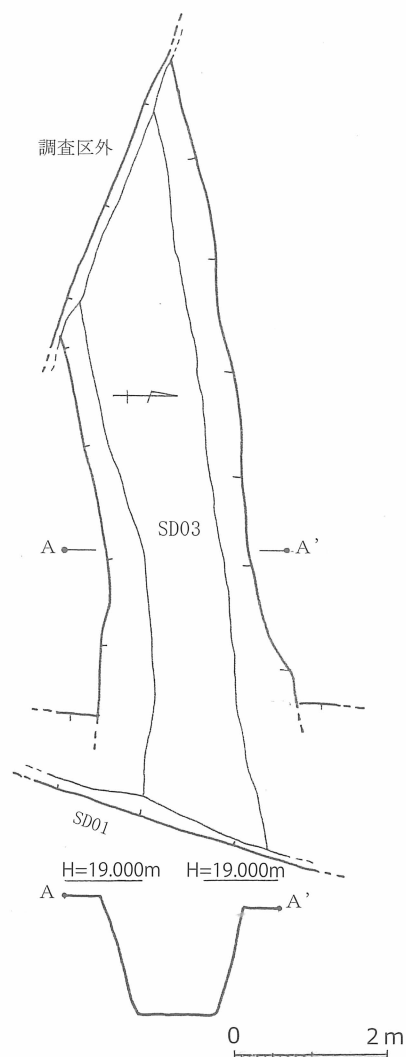
SD03は、土層からSD01よりも後続し、弥生時代後期～平安時代両方の可能性が残るが、今回の調査区内では明確にすることが出来なかった。周辺の工事立会等で発見されている溝状遺構の断面形状等からは、平安時代前後に属する区画溝の可能性が考えられる。

③土坑 (SK)

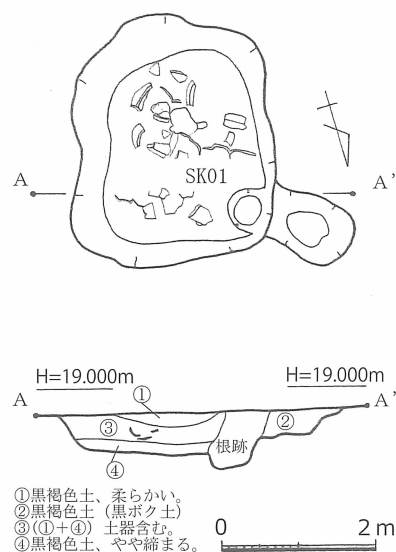
1区では、土坑はSK01～SK09の9基の番号を付した。ただし、いくつかの土坑は調査中に現代の耕作等に伴うものであることが判明したため、新しい時期のものも含まれている。そこで、新しい時期の所産と判断したものに関しては第4図中に「攪乱」と明記した。以下では、それ以外の土坑に関して説明する。

1号土坑 (SK01) (第10～13図)

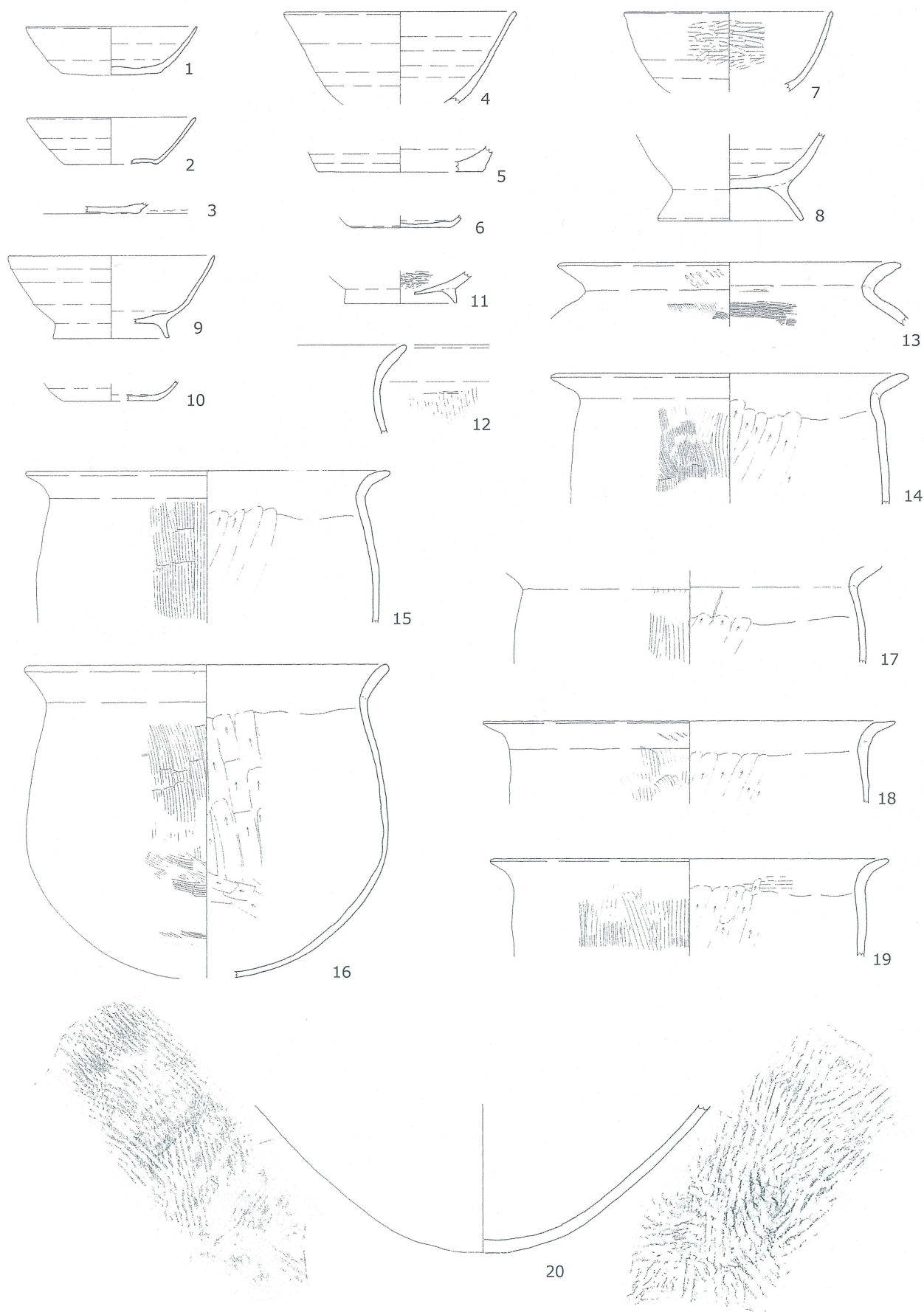
1号土坑は、調査区やや南東で発見された土坑である。平面形は160cm×130cmの、楕円形の土坑である。検出面からの深さは約25cmであり、土坑内からは焼土粒とともに土器が大量に出土したことから、廃棄土坑と思われる。



第9図 弥五郎遺跡2次1区SD03
実測図 (S=1/100)

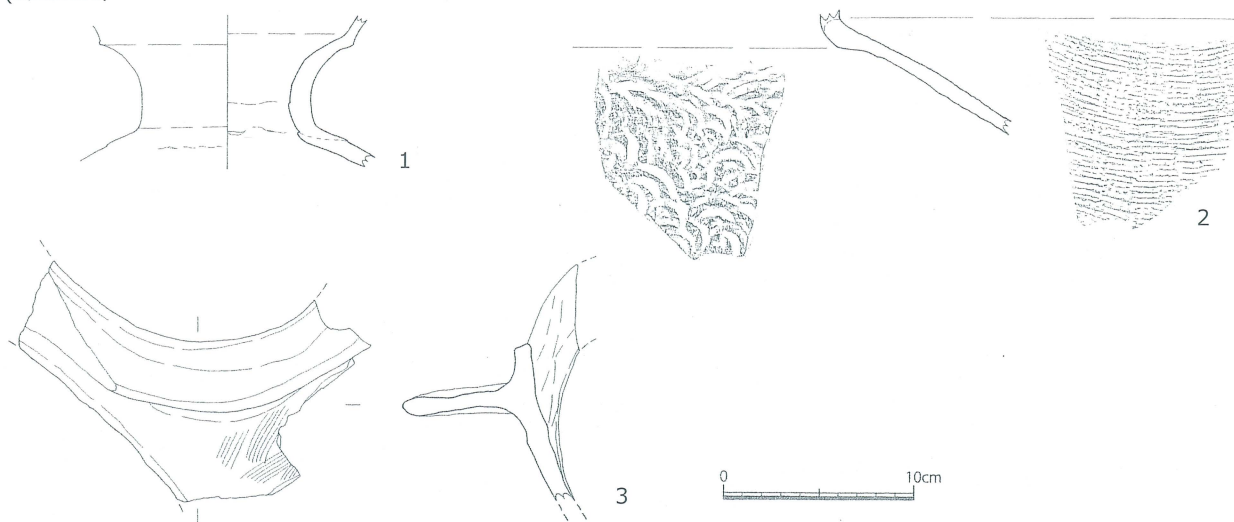


第10図 弥五郎遺跡2次1区SK01
実測図 (S=1/80)

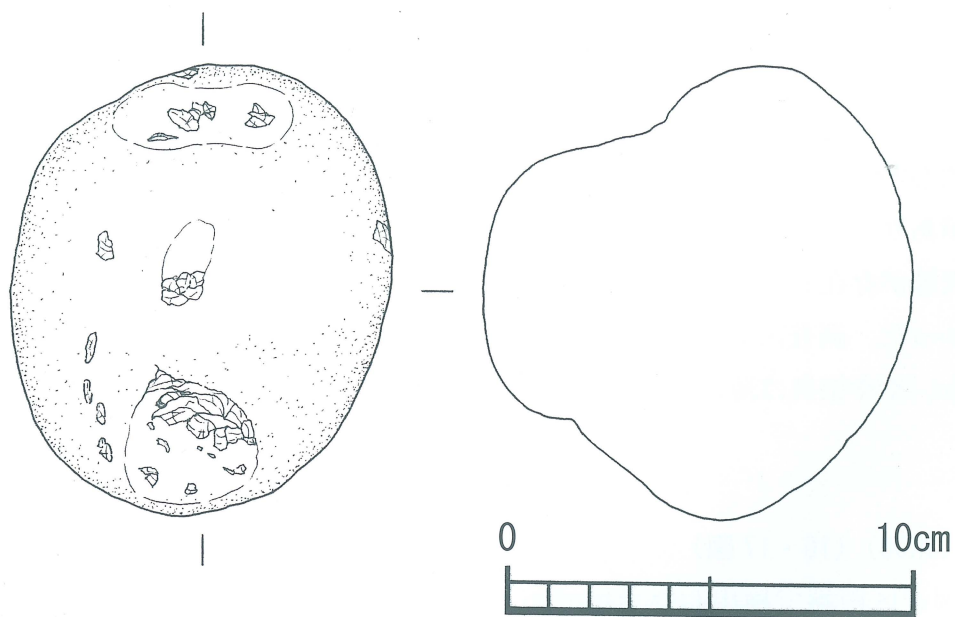


第 11 図 弥五郎遺跡 2 次 1 区 SK01 出土土器 1 (S=1/4)

(1区SK01)



第12図 弥五郎遺跡2次1区SK01出土土器2 (S=1/4)



第13図 弥五郎遺跡2次1区SK01出土石器 (S=1/2)

SK01 出土遺物を第11～13図に示す。土師器・須恵器の坏類や黒色土器の椀(11図1～11)は、全て底部は回転ヘラ切りによる切り離しが行なわれている。高台も高くなっていることから、8世紀後半～9世紀前半前後の時期と思われる。

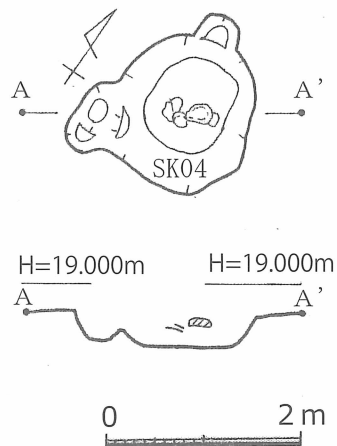
11図12～19は甕形土器で、形状の特徴から古代に属する。11図20は須恵器の甕形土器の底部片である。

12図1は須恵器の壺形土器の口縁部片、12図2は須恵器の甕形土器の頸部付近の破片である。13図は、円礫であるが表面がつるつるしており、磨石等の石器として用いられた可能性がある石であるが、用途は確定的ではない。石器であると思われる。

4号土坑 (SK04) (14・17 図)

1 区の調査区北東側、SD01 の隣で発見した土坑である。径約 70cm の円形の土坑である。検出面からの深さは約 20cm で、ピットや木の根によると思われる攪乱部分も見られる。やわらかい黒褐色土(黒ボク土)で埋没しており、底面から浮いた形で土器の出土が確認された。

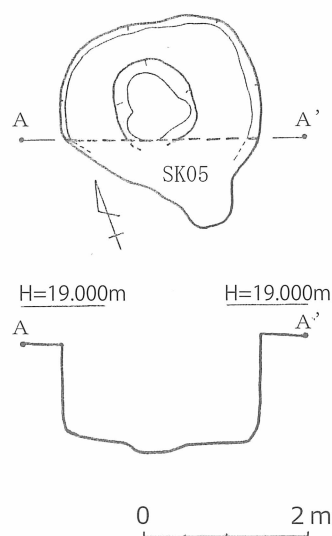
1 区 SK04 出土土器を第 17 図に示す。1 は土師器の坏で底部は回転ヘラ切りである。2・3 は黒色土器の椀、4 は土師器の甕形土器である。1～4 はいずれも古代に属する。



第 14 図 弥五郎遺跡 2 次 1 区 SK04 実測図 (S=1/80)

5号土坑 (SK05) (15 図)

1 区の調査区北端で発見された土坑である。径約 120cm の円形であり、検出面からの深さは約 70cm である。焼土粒・黄色ロームブロックを含むやわらかい黒褐色土(黒ボク土)で埋没していた。底面中央部分が約 20cm の範囲で約 5 cm の深さでくぼんでいる個所があり、その箇所のみ底面が硬く締まっていた。柱穴等が存在していた可能性がある。遺物の出土は無かった。調査区 1 区での土坑の形状や土層の類似から、やや根拠は薄い但古代に属すると思われる。

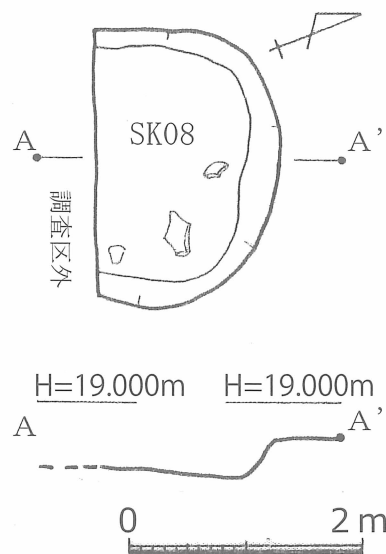


第 15 図 弥五郎遺跡 2 次 1 区 SK05 実測図 (S=1/80)

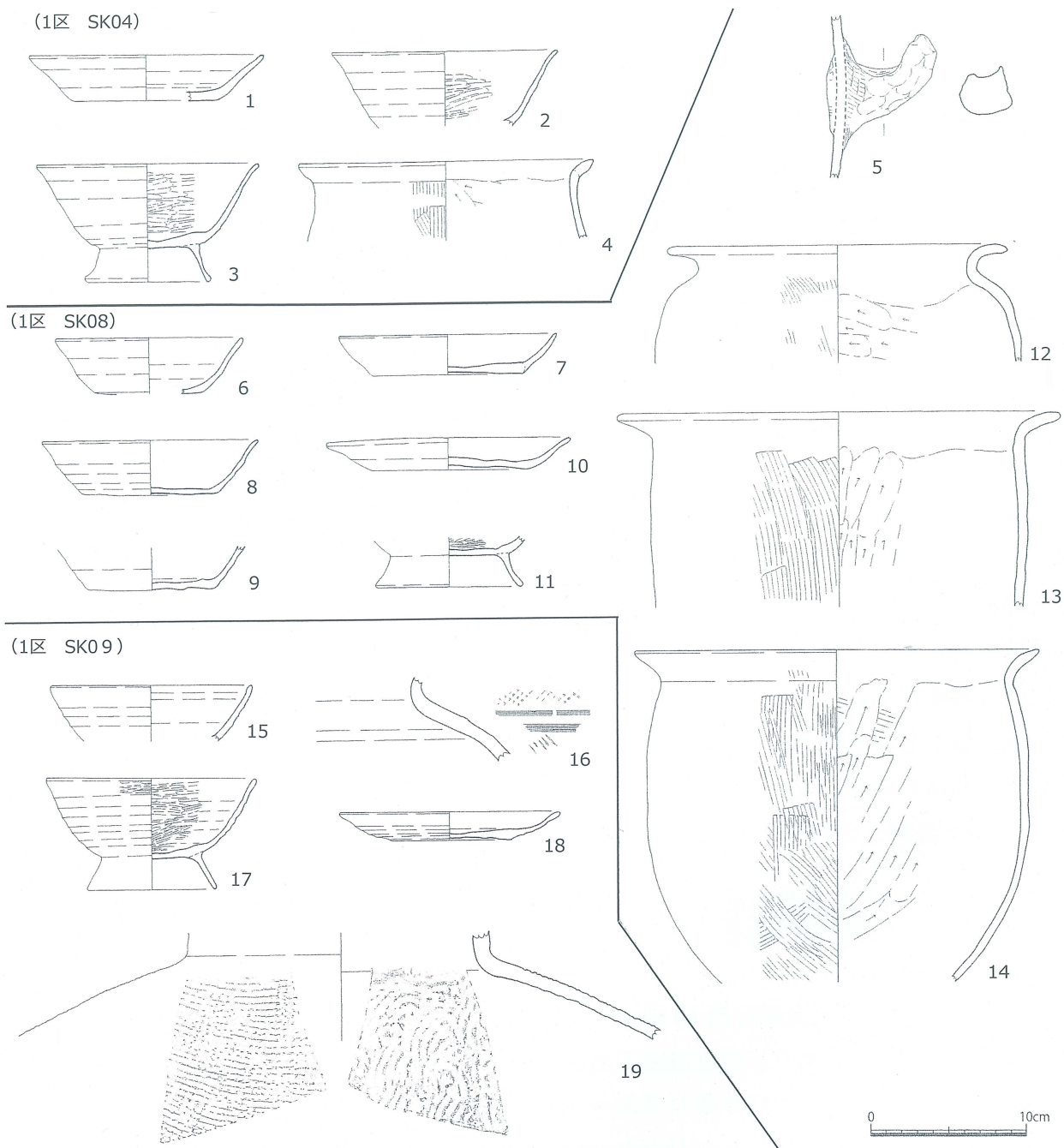
8号土坑 (SK08) (16・17 図)

1 区の調査区南端で検出した土坑である。径約 110cm の円形の土坑で、南半分は調査区外に延びている。検出面からの深さは約 10cm であり、他の土坑と同じく、やわらかい焼土粒・炭粒を含む黒ボク土で埋没していた。土坑内からは、多量の土器片の出土があった。

出土土器を第 17 図に示す。5 は甕の把手、6～10 は坏類で、全て回転ヘラ切りによるロクロ切り離しである。11 は黒色土器 A 類の椀、12～14 は土師器の甕形土器である。遺物はその特徴から、全て古代に属する。1 区の他の土坑との類似から、SK08 も古代に属する土坑と思われる。



第 16 図 弥五郎遺跡 2 次 1 区 SK08 実測図 (S=1/80)

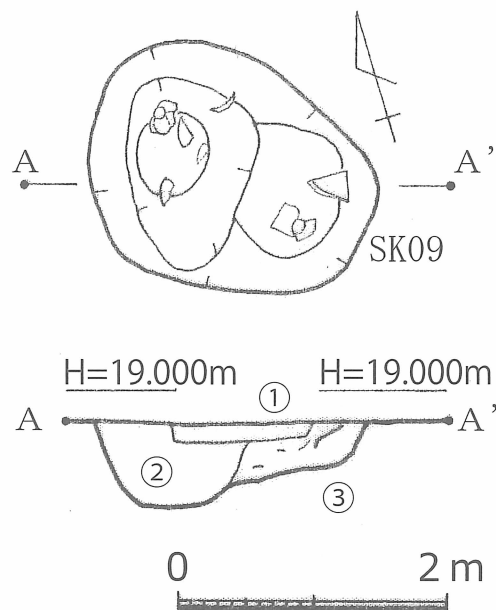


第17図 弥五郎遺跡2次1区SK04・SK08・SK09出土遺物 (S=1/4)

9号土坑 (SK09) (17・18 図)

1区調査区の北端やや西寄りで発見された土坑である。平面形は長辺約120cm、短辺約80cmの不整形な楕円形である底面の形状より、2つの土坑およびピットが重なっている可能性もあるが、調査時には明確にできなかった。土坑内からは、土器がまとまって出土している。

1区SK09出土土器を第17図15～19に示す。15・17は黒色土器A類の碗、16は須恵器の甕形土器の破片、19は土師器の皿である。遺物は全て古代に属する。1区で発見された土坑との類似等も含めて、SK09の時期は古代に属する廃棄土坑と思われる。



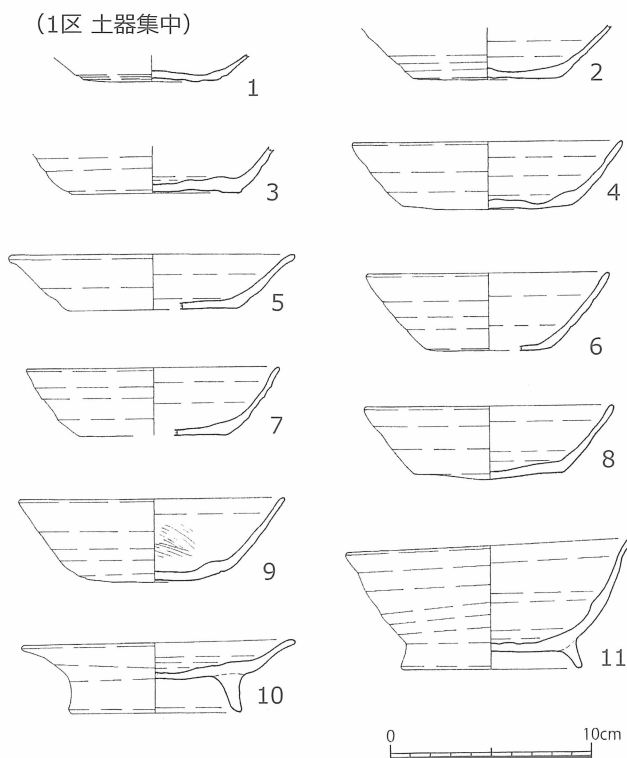
第18図 弥五郎遺跡2次1区SK09
実測図 (S=1/80)

④1区土器集中部 (第4・19 図)

1区調査区の中央付近やや北西寄りの箇所、焼土と共に土器が集中して出土する箇所があった。土坑や炉跡・竈等の可能性も考慮したが、土層からも遺構として捉えることが困難であった。その為調査記録作成時には「1区 土器集中」として他の遺物と分けて取り上げを行った。

もともとは、廃棄土坑等に伴う遺物であると思われる。

1区土器集中部出土土器を第19図に示す。全て坏・碗類であり、底部は全て回転ヘラ切りによるロクロ切り離しである。出土状況からも、一括廃棄がなされたものと思われ、同時期の所産で良好な一括資料であると思われる。時期は古代(平安時代)に属し、9世紀代の所産と思われる。

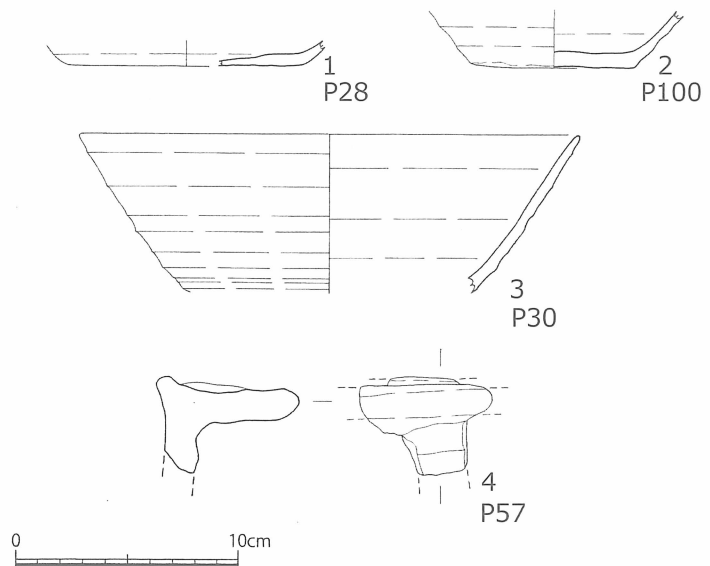


第19図 弥五郎遺跡2次1区土器集中部
出土遺物 (S=1/4)

⑤ 1区ピット出土土器（第20図）

1区のピットより出土した遺物を示すが、前述の掘立柱建物跡に伴う遺物は、残念ながら無かった。

1はP28出土で土師器の坏底部、2はP100出土の土師器坏底部、3はP30出土の須恵器の高台付坏であるが、黒色土器の技法に似ている。4はP57出土の移動式竈の破片である。いずれも古代（平安時代）に属する。この状況から、今回の1区検出のピットの大半も、古代（平安時代、8世紀末～9世紀前半）に属する可能性が高いと思われる。

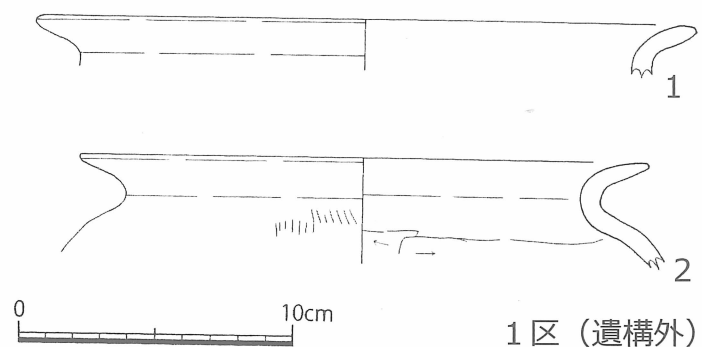


第20図 弥五郎遺跡2次1区ピット出土遺物（S=1/4）

⑥ 1区遺構外出土土器（第21図）

1区の遺構に伴わない遺物を第21図に示す。遺構外の遺物は、遺物包含層が削平によりほぼ残存していなかったことから、出土量は少なかった。

第21図1・2は、土師器の甕の口縁部片である。ともに古代に属する。



1区（遺構外）

第21図 弥五郎遺跡2次1区遺構外出土遺物（S=1/4）

⑦ 小結（弥五郎遺跡第2次1区）

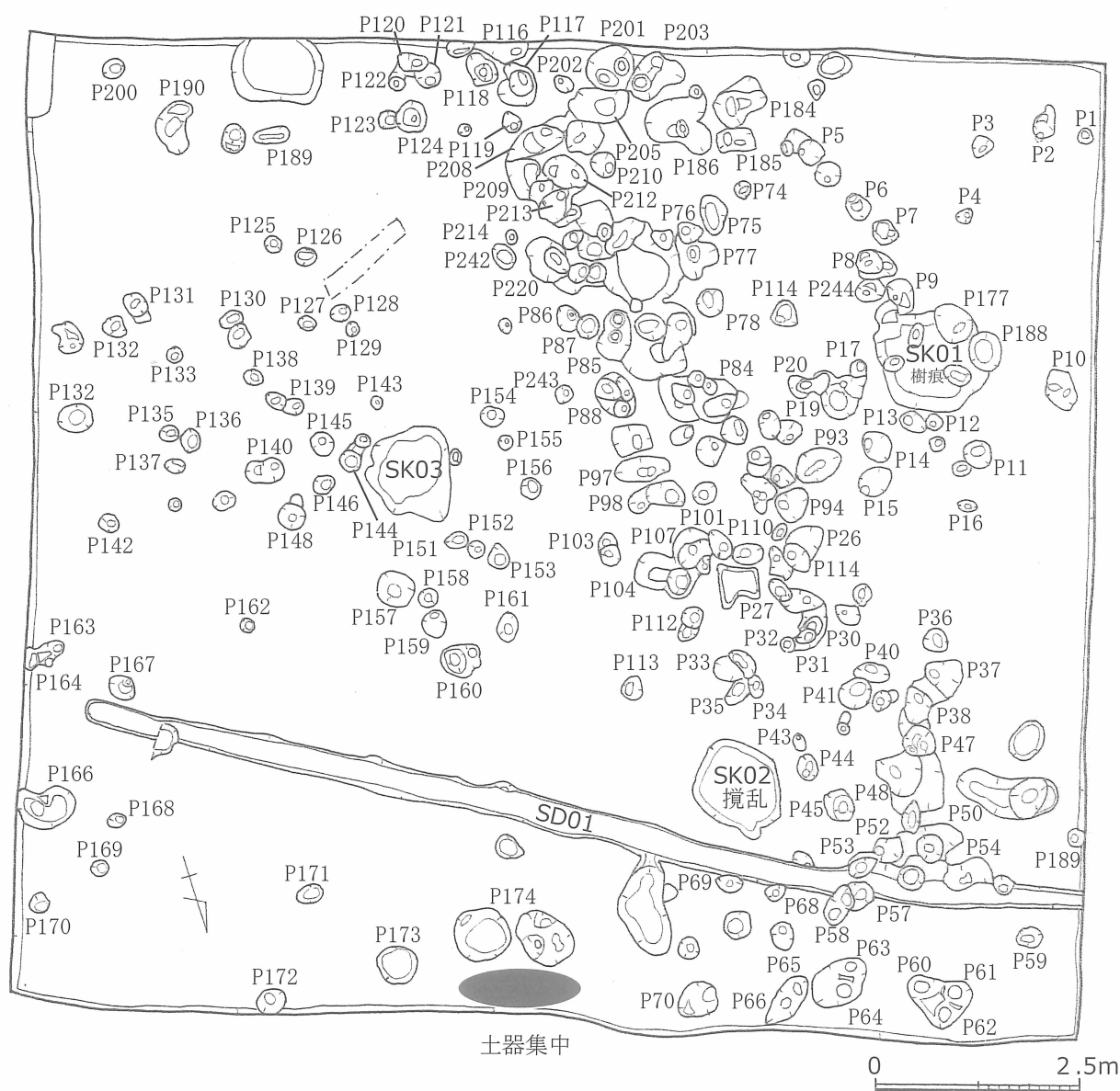
以上、弥五郎遺跡第2次調査1区で発見された遺構・遺物について報告した。時代は弥生時代と平安時代のものがあり、弥生時代はSD01のみではあるが、環濠の可能性が高い。調査区の南側約50mの南隣接地でも、過去に東西方向に延びる環濠と思われる溝が発見されており、今回の調査区周辺に弥生時代の環濠集落が広がり、今回の調査地より北側に延びる可能性が高いことが判明したのは大きな成果であった。

また、古代では溝状遺構と土坑・ピットが発見され、集落域中央部の一部の状況が判明したのは大きな成果であった。

B 弥五郎遺跡第2次調査2区の遺構と遺物（第22図～第27図）

弥五郎遺跡第2次調査2区では、溝状遺構1条、土坑3基およびピットが多数発見された。ピットは特に、調査区の北西で多量に発見され、その平面配置からも数件の掘立柱建物が存在することは明らかである。ただし、調査を実施した令和2年度は発掘調査を要する開発が非常に多く、調査期間が年度末の限られた時間となってしまうため、十分な検討を行うことが叶わなかった。本報告では、検出したピットを示し、その可能性について触れるにとどめざるを得なかった。調査体制充実等も含め、今後の課題である。

では以下に、弥五郎遺跡第2次調査2区で検出した遺構・遺物を報告する。



第22図 弥五郎遺跡2次2区調査区全体図 (S=1/200)

①溝状遺構 (SD)

1号溝状遺構 (SD01) (第 23 図)

2 区の南端で発見した溝状遺構である。幅約 40 cm、深さ約 30 cm で、東西方向に直線的に延びていて、調査区の西端で途切れる箇所がある。

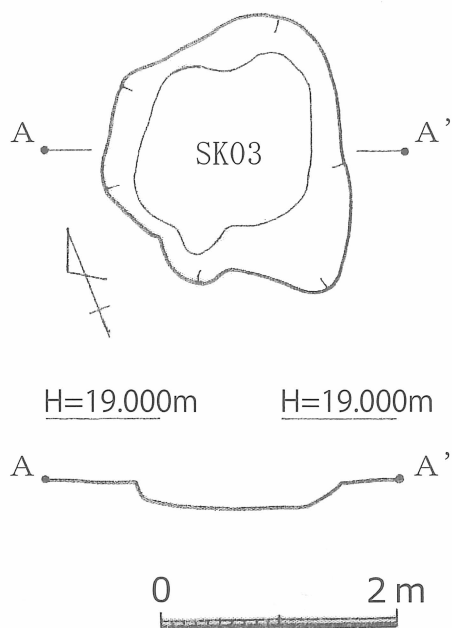
覆土は黒褐色土であるが、1 区の溝状遺構のように締まりがない状況では無く、やや粘性を有していた。また、水性堆積層等の水が流れた痕跡も見出されなかったことから、水路等ではないと思われる。

遺物は土師器と思われる土器の小片が少量あったのみであり、図示できる遺物は無かった。

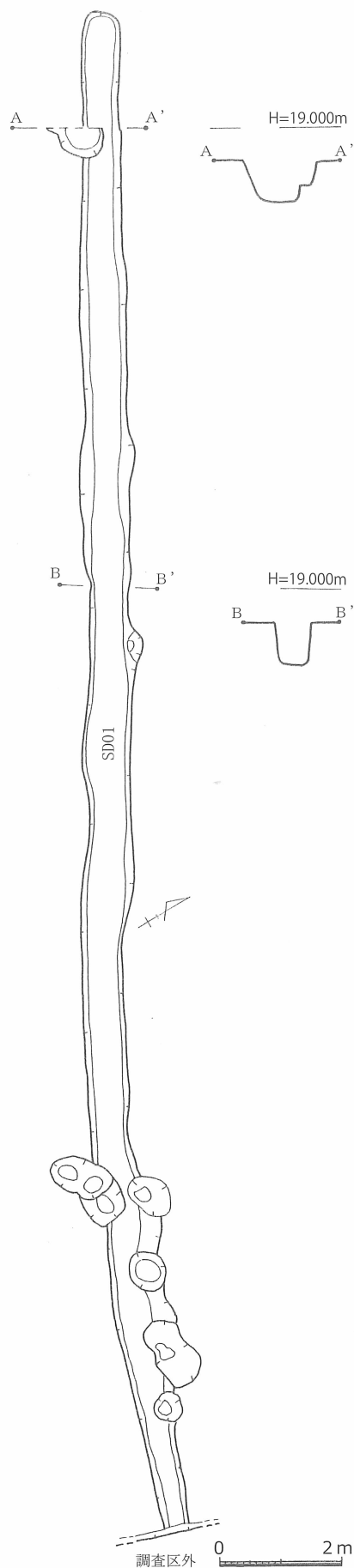
直線的に延びる細い溝状遺構であるので、時期は弥生時代ではなく、古くても平安時代であると思われ、さらに新しい時期の所産である可能性も残る。遺構の性格は、集落等の中を区画する区画溝と思われる。

②土坑 (SK) (第 24 図)

2 区の SK は全てで 4 基あったが、1 区と同様に新しい時期の穴も SK の番号を付したため、覆土・形状等から明らかに後世の攪乱を受けているものを外すと、SK03 の 1 基のみとなる。



第 24 図 弥五郎遺跡 2 次 2 区 SK03
(S=1/80)



第 23 図 弥五郎遺跡 2 次 2 区 SD01
実測図 (S=1/150)

3号土坑 (SK03) (第24図)

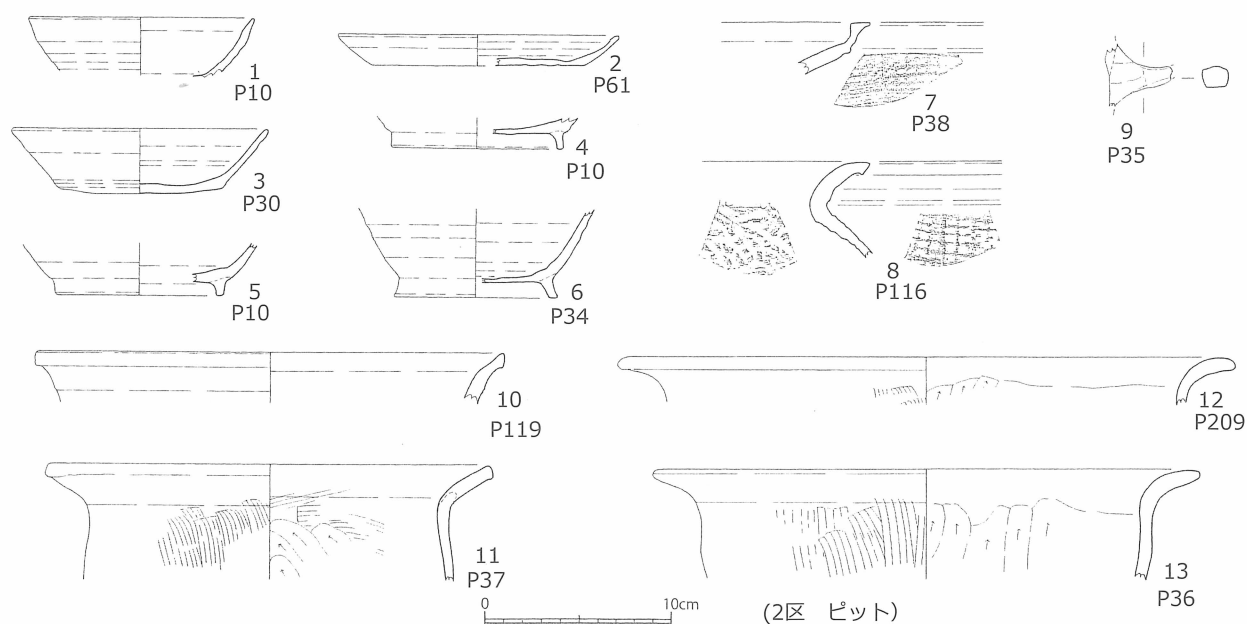
SK03は、調査区中央やや西側で発見された土坑である。長辺約100cm、短辺約60cm、深さ10cm程度の、不整形な円形の土坑である。出土遺物は確認されなかった。時期に関しても、不明であるが、周辺の状況や土層等から、古代(平安時代)の可能性が高いと思われる。

③ピット (P) (第25図)

2区ではピットは多数発見されており、特に調査区北西側にまとまって存在している。この北西側のピットには、樹痕や風倒木痕も重なって不明瞭ではあるが、いくつかの規則的な四角形配列が見いだせることから、掘立柱建物跡の同一箇所数次にわたる建て替えがあったものと思われる。また、調査区西端の方には円形の配列となるピットもあり、弥生時代以前の竪穴建物等に伴う可能性もあるが、残存が悪く不明瞭である。

第25図に、2区のピットから出土した遺物を示す。1～3は坏類、4～6は高台付坏で、いずれも底部は回転ヘラ切りによる底部切り離しである。7・8は須恵器の甕の口縁部片、9は甕形土器ないし甕形土器の把手である。10～13は、土師器の甕である。10～13は、土師器の甕である。

以上のように、2区ピット出土土器のうち図化可能なものは全て古代(平安時代)に属するものが多く、ピットの大半が平安時代の所産であることを示唆している。



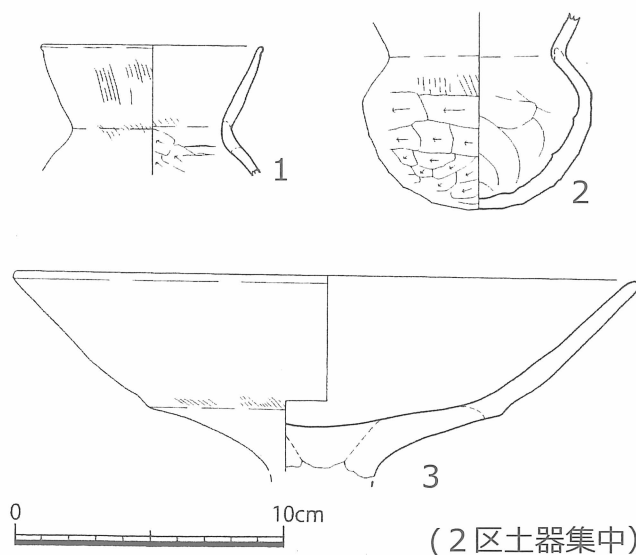
第25図 弥五郎遺跡2次2区ピット出土遺物実測図 (S=1/4)

④ 2区土器集中部

(第22・26図)

2区でも1区と同様に、土器が集中する箇所が確認された。調査区南端の中央付近で、1区と同様に焼土粒・炭粒と共に土器のまとまりが見いだされた。遺構確認のため精査したが、遺構を認識することが出来なかった。そのため、調査では「2区土器集中」として取り扱った。今回の調査では移動式竈も出土しているため、掘り込みを有しない形での火処等があった可能性も考慮したが、遺構を認識できなかった。周辺の遺構・遺物の状況からも、炉跡や竈等ではなく、土坑が存在する可能性も考えられる。

2区土器集中区出土遺物を、第26図に示す。1・2は小型丸底土器で、その壺形の形状から古墳時代後期に属する。3は土師器の高坏であり、やや径が大きいので、古墳時代前期に属する可能性がある。弥五郎遺跡の既往および今回の調査では、古墳時代後期土器の出土は少ないので、貴重な発見となった。



第26図 弥五郎遺跡2次2区土器集中部出土遺物
(S=1/4)

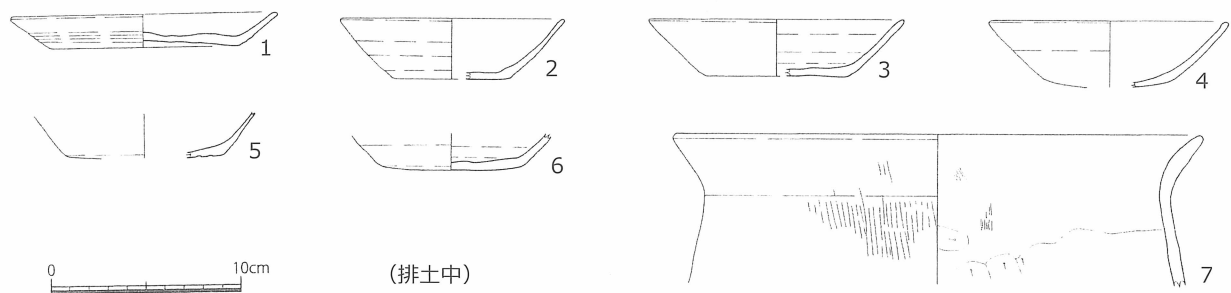
⑤ 弥五郎遺跡第2次調査2区の小結

以上が弥五郎遺跡第2次調査2区の遺構・遺物である。注目されるのは調査区北西箇所を中心としたピット群であり、弥五郎遺跡平安時代集落の中心域の状況と思われる。この場所で建物を幾度となく建換えをし、継続して生活がなされていた状況が想起される。

また、遺構は不明確ではあるものの、土器集中区で古墳時代後期の遺物も確認された。弥五郎遺跡の既往の調査では、弥生時代後期から古墳時代前期までの遺構・遺物が確認されていたが、今回古墳時代後期の遺物も発見されたことで、弥五郎遺跡集落が古墳時代後期にも存続していた証拠となるとと思われる。

D 弥五郎遺跡第2次調査の表土・排土出土土器 (第27図)

最後に、弥五郎遺跡第2次調査の表土中・排土中より出土した遺物のうち、図化可能であったものを示す(第27図)。1～6は坏類であり、いずれも底部は回転ヘラ切りによるロクロ切り離しである。7は土師器の甕である。



第 27 図 弥五郎遺跡 2 次調査遺物外出土遺物 (S=1/4)

5 総 括

最後に今回の弥五郎遺跡第 2 次調査に関して総括し、弥五郎遺跡の今後の課題について若干記したい。

弥五郎遺跡は、八女市西端部の室岡遺跡群に所在する。室岡遺跡群は、弥生時代を中心とした旧八女市を代表する集落遺跡のひとつであり、亀甲遺跡など学史にも著名な遺跡を包含する、八女市でも代表的な遺跡群のひとつである。

弥五郎遺跡では、過去に土器出土が確認された事例や試掘・確認調査等により、弥生時代および平安時代の集落遺跡の存在が確認されていた。弥五郎遺跡第 2 次調査は約 300 m² と小さな範囲ではあるが、平成 27 年度の第 1 次調査（2 次調査区西隣接地）に続いて 2 回目の本格的な発掘調査である。調査では、過去の出土品から予想された弥生時代後期～古墳時代初頭および平安時代の遺構・遺物が確認されたほか、今回の第 2 次調査では遺構は明確にできなかったものの、古墳時代後期の遺物も確認され、室岡遺跡群集落の存続期間を検討するうえでは貴重な発見であった（第 27 図）。

1 区では、平安時代集落に伴う遺構・遺物が多く発見されたことが成果であったが、弥生時代環濠（SD01）の発見は大きな成果であった。今回の調査地南側でも数箇所弥生時代環濠の存在が把握されており、弥五郎遺跡の弥生時代集落の範囲を考えるうえでは重要である。

2 区でも同様に、平安時代を中心とした遺構・遺物の発見があり、特にピット群の存在は建物跡の幾度にもわたる建て替えがなされていることの証左であり、2 区周辺が平安時代集落の中心部であることが把握されたことが、最も大きな成果であった。

なお、弥五郎遺跡では平成 27 年度の 1 次調査時に、八女市周辺では珍しい、平安時代の緑釉陶器の出土があった。小片ではあったが、この緑釉陶器は防長系のものであり、一般集落で出土するようなものではなく、当時の区的な施設（官衙・寺院等）との関連が想起される。西側の筑後市域には、弥五郎遺跡からは 1 Km 程西側になるが、西海道があり、駅家推定地も存在する。弥五郎遺跡から西海道は目視できる距離ではあるが、室岡遺跡群周辺にも古代の施設

等が存在する可能性を示唆している。今後の調査事例の増加による解明が期待される。

本調査地周辺は、国道 442 号線バイパスの開通以来開発が進み、近年住宅地として変貌を遂げ、八女市の中でも賑わいを見せ人口も増加している地域であるため、開発が多い地区であるが、弥五郎遺跡周辺では上記の通り重要な遺構・遺物が埋蔵されている可能性が高いことから、今後も細心の注意が必要である。

第 1 表 弥五郎遺跡 2 次調査出土土器観察表

挿図 番号	出土 地点	器形	焼成	色調 (外面 / 内面)	胎土	成形・整形手法等	寸 法		備 考 (種類・残存等)	実測図 番 号
							口 径 (底径)	器高 残存高		
7図 1	SD01	弥生土器 壺	軟質	にぶい黄橙/浅黄橙	d	内外面共にハケ後ナデ整形。頭部付近に突帯添付。	22.4 —	11.6	約1/4残存。口縁付近に剥離多。	18
7図 2	SD03	弥生土器 甕	軟質	にぶい黄橙/にぶい黄橙	a	内外面共にハケ目後ナデ	— 7.3	4.25	底部のみ。	59
11図 1	SK01	土師器 杯	軟質	橙/にぶい黄橙	c	内外面回転ナデ成形後、底部ヘラ切り後板ナデ。	12.4 7.0	3.5	約1/2残存。	3
11図 2	SK01	土師器 杯	軟質	にぶい黄/明黄褐	c	内外面回転ナデ成形後、底部ヘラ切り。	12.3 6.6	3.4	約1/4残存。	101
11図 3	SK01 上	須恵器 杯	硬質	灰白/灰白	精良 砂礫少	内外面回転ナデ成形後、底部ヘラ切り。	—	0.8	底部小片。	43
11図 4	SK01	土師器 椀	軟質	にぶい黄橙/にぶい黄橙	b	内外面回転ナデ成形後、高台添付。	15.0 8.0	6.0	底部	52
11図 5	SK01 上	土師器 杯	軟質	にぶい橙/橙	精良 砂礫少	内外面回転ナデ成形後、底部ヘラ切り。	9.5 6.6	1.45	約1/3残存。	53
11図 6	SK01 No.05	黒色土器 椀	軟質	にぶい黄橙/黄灰	c	内外面回転ナデ成形。	17.0 —	6.6	約1/4残存。 黒色土器A類。	105
11図 7	SK01 上	須恵器 瓶	硬質	灰/灰	精良 砂礫少	内外面ナデ成形後、底部ヘラ切り。	12.0 —	1.9	約1/4残存。	64
12図 8	SK01	土師器 杯	軟質	にぶい黄橙/にぶい橙	c	内外面回転ナデ成形後、底部ヘラ切り後板ナデ。	— 7.2	0.9	底部のみ残存。	54
11図 9	SK01	黒色土器 椀	軟質	にぶい褐/黒	精良 砂礫少	内外面回転ナデ成形後、内面ミガキ。	— 8.2	2.3	約2/5残存。 黒色土器A類	4
11図 10	SK01	土師器 杯	軟質	にぶい黄橙/にぶい黄橙	a	内外面ナデ後、ミガキ。	15.0 —	5.8	約1/3残存。黒色土器A類。(黒色化)	51
11図 11	SK01 No.08	黒色土器 椀	軟質	にぶい橙/黄灰	c	内外面回転ナデ成形後、外面回転ヘラケズリ。	— 10.1	6.3	口縁欠く。 黒色土器A類	1
11図 12	SK01	土師器 甕	軟質	にぶい黄橙/にぶい黄橙	b	内外面ナデ後、外面ハケ目。	—	6.3	口縁部小片。	44
11図 13	SK01 No.06	土師器 甕	軟質	にぶい黄橙/にぶい黄橙	a	外面ハケ目、内面タテ方向のケズリ。	26.0 —	11.0	約1/2残存。 外面スス付着	50
11図 14	SK01 No.07	土師器 甕	軟質	にぶい黄橙/にぶい黄橙	b	外面ハケ目、内面ケズリ、口縁部ヨコナデ。	26.6 —	22.6	約1/4残存。 外面煤付着	100
11図 15	SK01	土師器 甕	軟質	にぶい黄橙/橙	b	内外面タタキ成形後、胴部内外面ハケ目、口縁部ヨコナデ。	25.0 —	4.65	約1/5残存。 両面黒斑有	103
11図 16	SK01	土師器 甕	軟質	にぶい黄橙/灰黄褐	a	外面ハケ目、内面タテ方向のケズリ、口縁部ヨコナデ。	26.0 —	9.4	約1/4残存。外面黒斑内面コゲ有。	2
11図 17	SK01	土師器 甕	軟質	にぶい黄褐/にぶい黄橙	c	外面ハケ目、内面ナデ後ケズリ、口縁部ヨコナデ。内面にケズリ工具痕有。	28.0 —	7.45	約1/8残存。 外面煤付着。	104
11図 18	SK01 上	土師器 甕	軟質	にぶい黄橙/にぶい黄橙	a	外面ハケ目、内面タテ方向のケズリ、口縁部ヨコナデ。	29.8 —	6.0	約1/8残存。 外面煤付着。	102
11図 19	SK01 No.01	土師器 甕	軟質	にぶい褐/にぶい橙	c	外面ハケ目、内面タテ方向のケズリ、口縁部ヨコナデ。	29.0 —	7.0	約1/6残存。 外面被熱痕有。	6
11図 20	SK01	須恵器 甕	軟質	橙/にぶい橙	精良 砂礫少	内外面タタキ成形。	— 3.4	10.7	底部のみ。赤焼（八女産）	65
12図 1	SK01	須恵器 甕	硬質	灰褐/褐灰	精良 砂礫少	内外面ナデ成形後、内面ナデ。	—	8.2	頭部。外面・口縁内面に自然釉付着。	5
12図 2	SK01	須恵器 甕	硬質	にぶい黄褐/にぶい褐	精良 砂礫少	内外面タタキ成形。	—	6.7	小片。赤焼（八女産）。	122
12図 3	SK01 No.02	土師器 甕	軟質	にぶい橙/にぶい橙	a	内外面ハケ目後ナデ。	—	12.5	小片。煤付着。	57
17図 1	SK04 No.02	土師器 杯	軟質	にぶい橙/にぶい橙	c	内外面回転ナデ成形後、底部ヘラ切り。	14.8 9.0	2.9	約1/2残存。	56
17図 2	SK04	土師器 杯	軟質	にぶい黄橙/黄灰	c	内外面回転ナデ成形後、内面ミガキ。	14.4 —	4.8	約1/4残存。 黒色土器A類。	8
17図 3	SK04 No.01	黒色土器 椀	軟質	にぶい黄橙/暗灰黄	c	内外面回転ナデ成形後、内面ミガキ。	14.2 8.05	7.5	底部及び口縁の一部 黒色土器A類。	106
17図 4	SK04	土師器 甕	軟質	橙/橙	c	外面ハケ目、内面ケズリ。	18.8 —	5.0	口縁1/8 外面被熱で赤色化	55
17図 5	SK08	土師器 瓶	軟質	にぶい橙/にぶい橙	a	外面ハケ目後指ナデ、内面ハケ目後ナデ。	10.2 3.2	2.8	把手のみ	12
17図 6	SK08	土師器 杯	軟質	橙/橙	c	内外面回転ナデ成形後、底部ヘラ切り。	11.9 7.0	3.5	約1/5残存。	11
17図 7	SK08	土師器 杯	軟質	橙/にぶい橙	c	内外面回転ナデ成形後、底部ヘラ切り。	13.9 9.6	2.5	約1/3残存。	9
17図 8	SK08	土師器 杯	軟質	にぶい黄橙/にぶい橙	精良 砂礫少	内外面回転ナデ成形後、底部ヘラ切り。	13.8 8.7	3.5	約1/3残存。	14
17図 9	SK08	土師器 杯	軟質	にぶい橙/にぶい黄橙	精良 砂礫少	内外面回転ナデ成形後、底部ヘラ切り。	8.1	2.7	約2/3残存。	7
17図 10	SK08	土師器 皿	軟質	にぶい黄褐/にぶい黄橙	c	外面回転ナデ成形後、底部ヘラ切り。底部外面煤付着。	15.6 9.9	2.0	ほぼ完形。外面黒液こぼれ痕・煤付着。	109
17図 11	SK08	黒色土器 椀	軟質	にぶい橙/黒	c	内外面回転ナデ成形後、内面ミガキ、高台添付。	— 9.2	3.2	底部（高台部） 黒色土器A類	10
17図 12	SK08	土師器 甕	軟質	にぶい黄橙/暗灰黄	a	外面ハケ目、内面ケズリ。	21.8 —	7.5	口縁1/2 口縁外面スス付着	108
17図 13	SK08	土師器 甕	軟質	橙/黄褐	a	外面ハケ目、内面ハケ目後ケズリ。	28.4 —	12.4	口縁1/2 外面に黒斑あり	107
17図 14	SK08	土師器 甕	軟質	にぶい橙/にぶい橙	a	外面ハケ目、内面ハケ目後ケズリ。	26.0 —	21.1	口縁～胴部1/2 外面スス付着	13

挿図 番号	出土 地点	器形	焼成	色調 (外面 ／内面)	胎土	成形・整形手法等	寸 法		備 考 (種類・残存等)	実測図 番 号
							口径 (底径)	器高 残存高		
17図 15	SK09 No.02	土師器 坏	軟質	にぶい橙/にぶい橙	c	内外面ナデ。	12.8 —	3.5	口縁1/2 口縁端部肥厚	58
17図 16	SK09 南側	須恵器 甕	硬質	褐灰/にぶい赤褐	精良 砂礫少	内外面タタキ後ナデ、外面板ナデ	—	5.4	小片。荒尾産の可能性あり。	15
17図 17	SK09 No.01	黒色土器 椀	軟質	浅黄橙/オリーブ黒	精良 砂礫少	内外面回転ナデ成形後、底部へラ切り、内面ミガキ。	13.5 8.2	7.1	口縁部一部欠損 黒色土器A類	17
17図 18	SK09 No.03	土師器 皿	軟質	橙/橙	精良 砂礫少	内外面回転ナデ成形後、底部へラ切り。	14.2 7.6	1.8	約2/3残存。	110
17図 19	SK09	須恵器 甕	硬質	灰黄褐/灰黄	精良 砂礫少	内外面タタキ成形。	—	6.9	小片。	16
19図 1	1区 集中	土師器 坏	軟質	にぶい橙/にぶい橙	精良 砂礫少	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り。	— 6.8	1.3	小片	113
19図 2	1区 集中	土師器 坏	軟質	にぶい黄橙/橙	c	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り。	— 7.3	2.6	底1/1	112
19図 3	1区 集中	土師器 坏	軟質	灰黄褐/暗灰黄	精良 砂礫少	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り後ナデ。見込みに円形のナデ。	— 8.5	2.3	底部のみ。	25
19図 4	1区 集中	土師器 坏	軟質	にぶい橙/にぶい橙	c	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り後ナデ。	13.2 8.5	3.4	小片1/4 底部へラ切り	21
19図 5	1区 集中	土師器 坏	軟質	橙/にぶい橙	c	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り。	13.6 8.0	2.7	小片1/4	60
19図 6	1区 集中	土師器 坏	軟質	にぶい橙/にぶい橙	精良 砂礫少	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り後ナデ。	12.0 6.1	3.8	約1/4残存。	22
19図 7	1区 集中	土師器 坏	硬質	にぶい黄橙/にぶい橙	精良 砂礫少	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り。	12.5 7.3	3.4	約1/4残存。	19
19図 8	1区 集中	土師器 坏	軟質	橙/橙	精良 砂礫少	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り。見込みにナデ。	12.2 7.3	3.7	約1/4残存。	20
19図 9	1区 集中	土師器 坏	軟質	橙/橙	c	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り後ナデ。内面にハケ目状工具ナデ。	13.1 7.4	4.0	約2/3残存。	23
19図 10	1区 集中	土師器 高台付坏	軟質	にぶい黄/にぶい黄	精良 砂礫少	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り後ナデ。	13.5 8.55	3.5	ほぼ完形 黒斑あり	111
19図 11	1区 集中	須恵器 高台付坏	軟質	灰白/灰白	石英・白色粒を含む	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り後ナデ。	14.1 9.0	6.1	口縁・底部の一部欠く。	24
20図 1	P 28	土師器 坏	軟質	にぶい黄橙/にぶい橙	精良 砂礫少	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り。	— 10.6	1.15	約1/4残存。	114
20図 2	P 100	土師器 坏	軟質	にぶい橙/にぶい黄橙	b	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り後ナデ。	— 7.3	2.6	底部黒斑あり。	28
20図 3	P 30	須恵器 鉢	軟質	灰黄/灰黄	精良 砂礫少	内外面共に回転ナデ成形。	22.2 —	7.1	約1/4残存。 瓦質に近い。	61
20図 4	P 57	土師器 甕	軟質	橙/橙	a	内外面共にハケ後ナデ、内面ケズリ。	—	4.5	小片	63
21図 1	1区	土師器 甕	軟質	にぶい橙/灰	石英・片岩・ 橙色粒を含む	内外面共にハケ後ナデ。	24.0 —	1.8	小片。	26
21図 2	1区	土師器 壺	軟質	橙/灰	a	内外面共にハケ後ナデ。内面ケズリ。	20.6 —	3.8	小片。	27
25図 1	P 10	土師器 坏	軟質	橙/橙	精良 砂礫少	内外面共に回転ナデ成形後、内面ナデ。	12.0 —	3.2	小片。	115
25図 2	P 61	土師器 皿	軟質	にぶい黄橙/にぶい黄橙	精良 砂礫少	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り後ナデ。	15.0 11.4	1.7	小片。	31
25図 3	P 70	土師器 坏	軟質	にぶい橙/橙	橙色粒を含む	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り。	13.6 8.7	3.5	約2/3残存。	118
25図 4	P 61	土師器 高台付坏	硬質	灰黄褐/灰黄褐	精良 砂礫少	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り。	— 9.2	1.2	約1/4残存。	117②
25図 5	P 60	土師器 高台付坏	軟質	灰褐/灰褐	精良 砂礫少	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り後高台添付。	— 9.0	2.9	約1/4残存。	30
25図 6	P 67	須恵器 椀	硬質	灰黄/灰黄	精良 砂礫少	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り後高台添付。	— 8.7	4.8	小片。	34
25図 7	P 242	須恵器 甕	硬質	赤褐/にぶい黄橙	精良 砂礫少	タタキ後ヨコナデ。	—	2.8	小片。内外面に自然釉。	38
25図 8	P 18	須恵器 甕	硬質	黄灰/黄灰	精良 砂礫少	タタキ（外面格子目・内面同心円）後ナデ。	—	5.2	小片。口縁部赤色自然釉付着（荒尾産）	116
25図 9	P 102	土師器 把手	軟質	にぶい橙/にぶい橙	石英・長石・角 閃石を含む	指押さえ・ナデによる成形。	3.4 1.4	1.2	把手のみ。甕か甕か。	35
25図 10	P 172	須恵器 甕	硬質	黄灰/暗灰黄	精良 砂礫少	内外面共に（ハケ目後）ヨコナデ。	25.0 —	2.7	小片。内外面自然釉付着	119
25図 11	P 209	土師器 甕	軟質	にぶい橙/にぶい橙	石英・長石・片 岩・橙色粒を含む	内外面共にハケ後ナデ、内面ケズリ。	23.3 —	6.2	口縁1/5	37
25図 12	P 209	土師器 甕	軟質	にぶい黄橙/にぶい黄橙	a	内外面共にハケ後ナデ、内面ケズリ。	33.0 —	2.6	小片。外面煤付着	120
25図 13	P 190	土師器 甕	軟質	にぶい橙/浅黄橙	a	内外面共にハケ後ナデ、内面ケズリ。	29.1 —	5.8	小片。外面煤付着	36
26図 1	2区 集中	土師器 埴	軟質	橙/橙	精良 砂礫少	内外面共にハケ後ナデ。内面ケズリ。	8.2 —	4.8	口縁1/2	117①
26図 2	2区 集中	土師器 埴	軟質	橙/橙	精良 砂礫少	内外面共にハケ後ナデ。内面ケズリ。	—	7.3	頸～底部	32
26図 3	2区 集中	弥生土器 高坏	軟質	橙/橙	暗褐色粒を含む	内外面共にハケ後ヨコナデ。	23.0	7.3	坏底部。	29
27図 1	排土	土師器 皿	軟質	浅黄橙/にぶい黄橙	c	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り後ナデ。	13.9 9.7	1.8	約4/5残存。	33
27図 2	排土	土師器 坏	軟質	浅黄橙/浅黄橙	c	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り後ナデ。	11.7 6.3	3.2	約1/6残存。	41
27図 3	排土	土師器 坏	軟質	橙/橙	c	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り後ナデ。	13.4 7.4	3.0	約1/2残存。	62
27図 4	排土	土師器 坏	軟質	明黄褐/明黄褐	精良 砂礫少	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り。	12.6 —	3.5	約1/4残存。	121
27図 5	排土	土師器 坏or壺	軟質	にぶい黄橙/にぶい橙	a	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り。底部に同心円の工具痕あり。	— 8.2	2.4	約1/3残存。	42
27図 6	排土	土師器 坏	軟質	にぶい橙/にぶい橙	a	内外面共に回転ナデ成形後、底部回転へラ切り後ナデ。	— 7.3	1.9	約1/2残存。	39
27図 7	排土	土師器 甕	軟質	にぶい黄橙/にぶい黄橙	a	内外面共にハケ後ナデ、内面ケズリ。	28.0 —	7.8	1/8残存。外面黒斑・ 被熱痕あり	40

※胎土欄の記号は、含まれる砂礫の一部に着目したものであり、下記の通りである。

a：石英+片岩（矢部川流域に特徴的な胎土） b：石英+角閃石+暗赤褐色粒（筑後～熊本地域に特徴のある胎土）

c：石英・橙色粒を含む胎土。d：金色粒を含む（花崗岩地帯に特徴的）

PLATES

図 版



弥五郎遺跡調査地遠景（南西より）



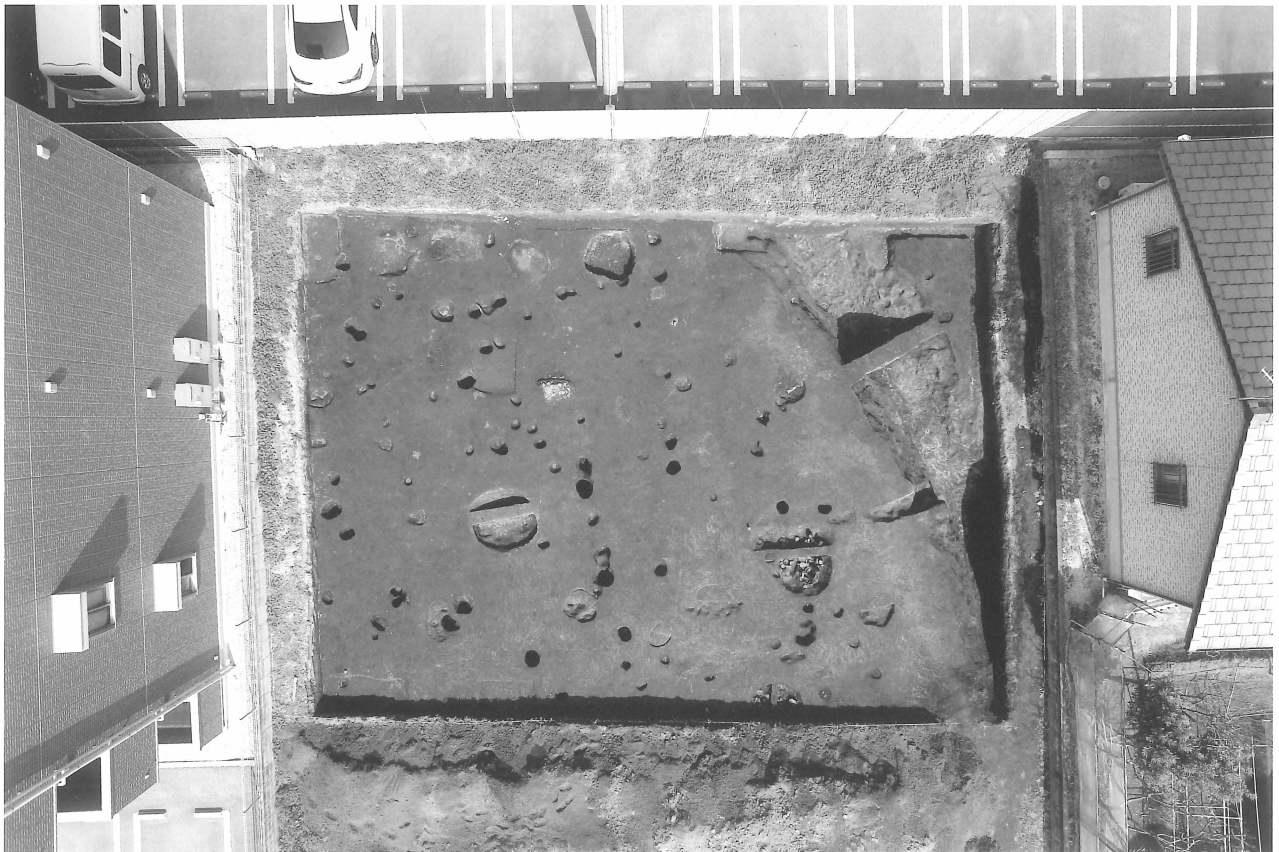
弥五郎遺跡調査地遠景（南より）



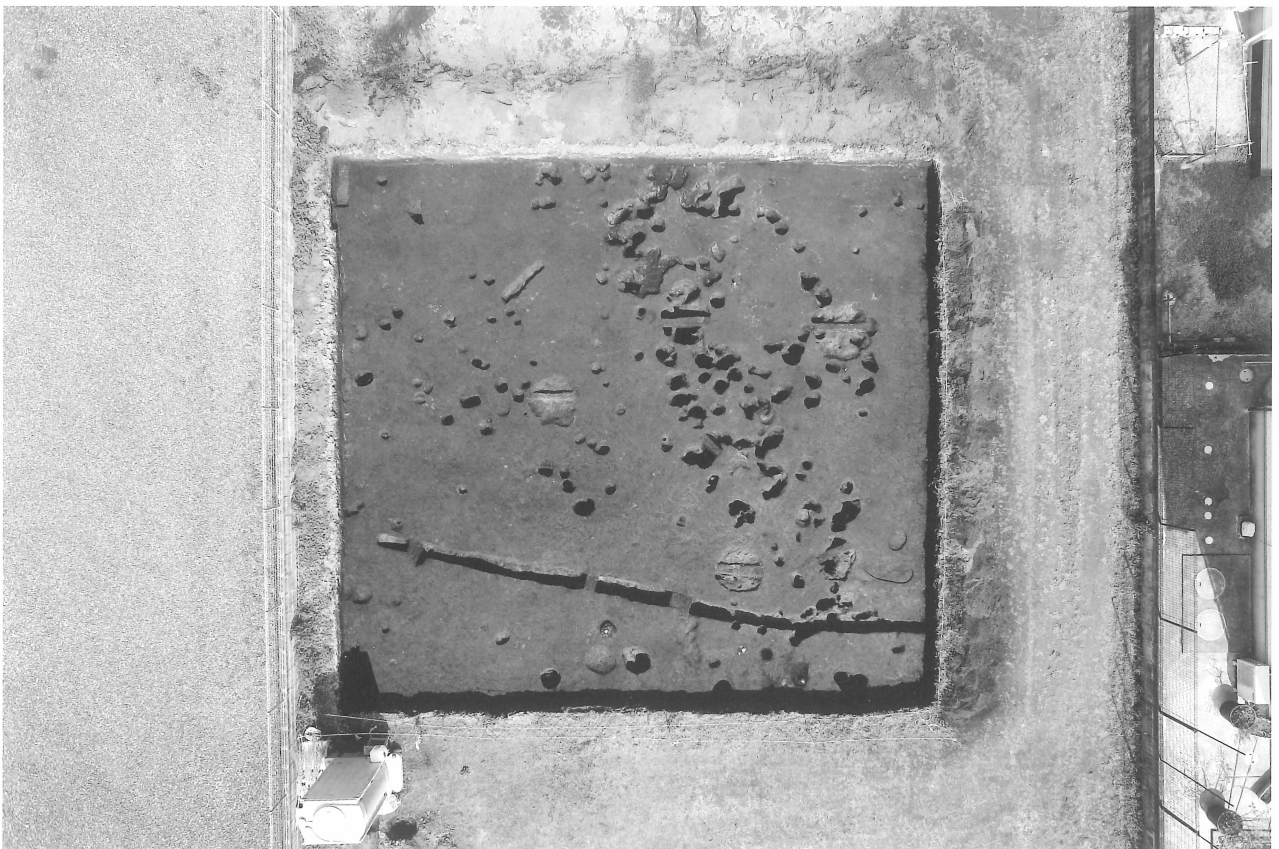
弥五郎遺跡 2 次調査地（上空より：上が東）



同 上



弥五郎遺跡 2 次 1 区（上空より：上が北）



弥五郎遺跡 2 次 1 区（上空より：上が北）



弥五郎遺跡 2次 調査風景（2区・南より）



弥五郎遺跡 2次 1区全景（調査区北側・西より）



弥五郎 2次 SD01（南より）



弥五郎 2次 SD01 土層（南より）



弥五郎 2次 1区 SK01（東より）



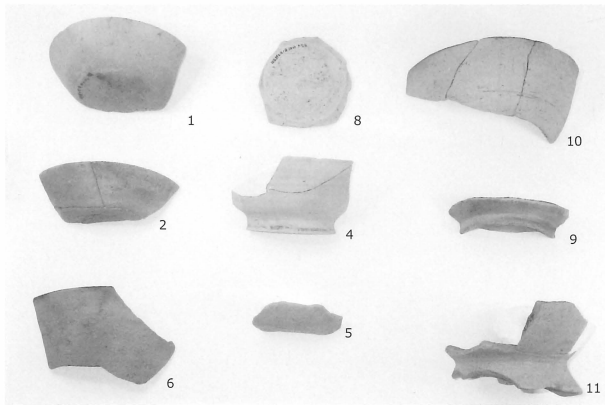
弥五郎 2次 1区土器集中（中央）・SB01（奥）（東より）



弥五郎 2次 1区 SK04（南より）



弥五郎 2次 1区 SK09（南より）



弥五郎 2 次 1 区 SK01 出土土器 1 (第 11 图)



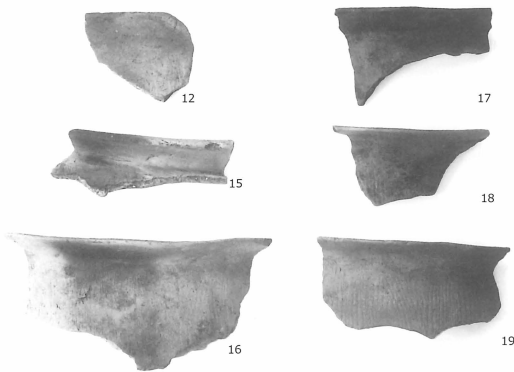
弥五郎 2 次 1 区 SK01 出土土器 2 (第 12 图)



弥五郎 2 次 1 区 SK01 出土土器 3 (第 11 图)



弥五郎 2 次 1 区 SK01 出土土器 4 (第 12 图)



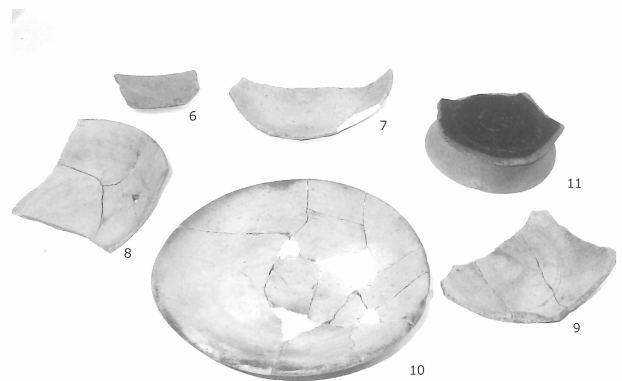
弥五郎 2 次 1 区 SK01 出土土器 5 (第 11 图)



弥五郎 2 次 1 区 SK01 出土土器 6 (第 11 图)



弥五郎 2 次 1 区 SK04 出土土器 (第 17 图)



弥五郎 2 次 1 区 SK08 出土土器 1 (第 17 图)



弥五郎 2 次 1 区 SK08 出土土器 2 (第 17 图)



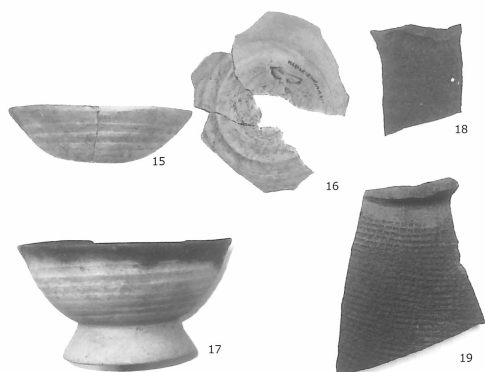
弥五郎 2 次 1 区 SK08 出土土器 3 (第 17 图)



弥五郎 2 次 1 区 SK08 出土土器 4 (第 17 图)



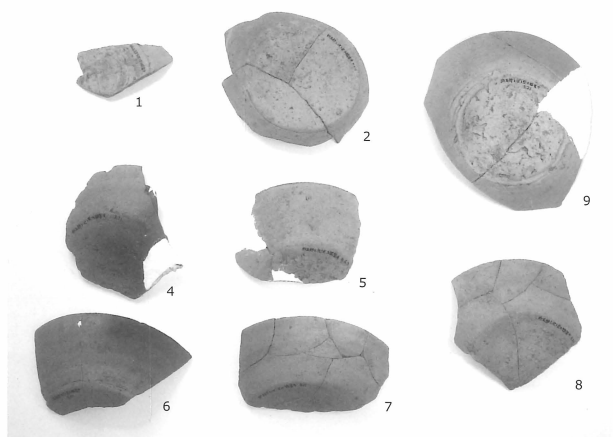
弥五郎 2 次 1 区 SK08 出土土器 5 (第 17 图)



弥五郎 2 次 1 区 SK09 出土土器 (第 17 图)



弥五郎 2 次 1 区土器集中出土土器 1 (第 19 图)



弥五郎 2 次 1 区土器集中出土土器 2 (第 19 图)



弥五郎 2 次 2 区土器集中出土土器 (第 26 图)

報 告 書 抄 録

ふりがな	やごろういせき 2							
書 名	弥五郎遺跡 2							
副 書 名	共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	八女市文化財調査報告書							
シ リ ー ズ 号	第 1 3 4 集							
編 著 者 名	檀 佳克 (だん よしかつ)							
編 集 機 関	八女市教育委員会							
所 在 地	〒834-8585 福岡県八女市本町 6 4 7 TEL. 0943-23-1982 FAX. 0943-24-4331							
発 行 年 月 日	西暦 2 0 2 2 年 3 月 3 1 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やごろういせき 弥五郎遺跡	ふくおかけんやめし 福岡県八女市 むろおかあざしげ 室岡字 志計 774-1	402109	408020	33° 12' 54"	130° 31' 15"	20210121 ～ 20210331	約 500 m ²	集合住宅 建 設
所収遺跡	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
弥五郎遺跡 (第 2 次調査)	集 落 跡	弥生時代・平安時代		溝状遺構 4 ・ 土坑13 ・ 掘立柱建物跡 2 + α ・ ビット346		弥生土器・土師器・須恵 器・黒色土器		
要 約	共同住宅建設に伴い発掘調査を実施した、弥五郎遺跡に関する報告である。 今回の発掘調査では、弥五郎遺跡の一部について、記録保存のための発掘調査を実施した。調査では平安時代の掘立柱建物跡と思われる柱穴および土坑が発見され、土師器・須恵器や黒色土器が出土した。その他、弥生時代の環濠 1 を発見した。 今回の発掘調査地では、平安時代集落とともに弥生時代後期から古墳時代にかけての集落跡も展開している状況が明らかとなった。調査区以外の周辺地区にも今回調査を実施した弥生時代・平安時代集落が良好に残存していることは明らかであり、今後の周辺地域の調査により、弥五郎遺跡集落の解明がより一層進むことが期待される。							

※座標は世界測地系による。国土地理院ホームページの地図検索システムより得たものであり、基準点測量によって得た値ではない。

弥 五 郎 遺 跡 2

八女市文化財調査報告書
第 134 集

令和 4 年 3 月 31 日

発行 八女市教育委員会
八女市本町 647

印刷 橋爪印刷
八女市吉田 1899-1